

## 不埒物語翻刻

著者名(日)	咲本 英恵, 本多 亜紀, 内田 保廣
雑誌名	共立女子大学文芸学部紀要
巻	58
ページ	19-71
発行年	2012-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00002431/">http://id.nii.ac.jp/1087/00002431/</a>



# 不埒物語翻刻

内	本	咲
田	多	本
保	亜	英
廣	紀	恵

はじめに

解題と挿絵部分は来年度の紀要に投稿することとし、ここでは簡単に本書を紹介し、翻刻に至った経緯と動機、凡例などを記す。

本書は未翻刻で、『佛鬼軍』や『無明法性合戦状』『強盗鬼神』の系譜をひく作品である。また、『根無草』や後の草双紙に出現する、地獄の鬼や閻魔の滑稽描写に至る作品でもある。談義本であり、狂講の一面を表すとも見える。内部に描かれる廓を中心とした遊興風俗は最終巻の「制札」に集約され興味深い。特にこの「制札」には埋め木による墨消が施される本と、簡略な墨消と埋め木以前の文字記載を保つ書物とが同一刊記で存在していることなど、注目を要する。

本書翻刻の目的は、資料的価値の他に、比較的読みやすい版本を利用した変体かな読解の教育システムを構築することにもある。その点については、来年度に詳述する予定である。こうした作業のため、システム部門を担当する本多亜紀が全く初めての経験になる翻刻作業に携わり、本書巻一の一部を担当した。多くの部分は本学文学部助手（日文研究室）の咲本英恵が翻刻した。巻二、三、四、

不埒物語翻刻

五は彼女の手になる。巻六、七は内田が翻字を行った。校正は咲本と内田が各々行ない、両者を校合した。

慶應義塾大学文学研究科の授業でも本書を取り上げ、博士課程三年、星瑞穂。修士課程二年中原由美子、修士課程一年、川端悠介、服部徹也、上野文裕の諸君が受講し、もっぱら読み下しと簡単な注釈を行った。

#### 底本

本書の翻刻は、架蔵本を底本とし、フランス国立図書館本によって架蔵本の欠巻、巻四を補った。同一刊記の異板、慶應義塾図書館本を参照し、異文は注記した。挿絵は巻四以外は架蔵本、巻四はフランス国立図書館本と慶應義塾図書館本によって補った。なお、慶應本の挿絵にはフランス国立図書館本との違いはなかった。

#### 凡例

書体などはなるべく使用されている書体に近い書体を用いた。以下にその例をあげる。

爰にはすべてはウ冠があるが通行書体にした。

違の異体字「之繞」に「麦」は「違」とした。

霊の異体字「ヨの下に大」は「霊」とした。

異の異体字「己の下に大」は「異」とした。

往古は往古に統一した。

泰山王と秦廣王の秦、秦は同一文字で書かれており、秦に統一した。

「射」を「躬」と表記するがそのままにした。

作品に特有の造字はその形を表せるように表記した。

促音の「っ」を小文字でしている箇所はそのまま残した。

明らかに小文字が使われている部分はポイントを落として表記した。

「。」は併用されており、「。」はそのまま、「」は「」で表記した。

卷七十八丁表の「Ⅱ」による見せ消ち部分はフランス本架蔵本では墨塗でかろうじて読みとれる部分、慶大本では板木から削除されている。なお「」によって補った部分は慶大本の修訂。

なお、[googlebook](#)に慶応義塾図書館本が公開されている。

不埒物語序

侘しかりき賤か臥家の

破れ窓より凍行月を

ながめて假寝かねし

折からはもひとり

竈のほそき煙りをさへ

たてかねし同匹の「序」オ

あり野辺の露ふく

むしの声くくに枕を

はなれてすか宿りに

来り夜もすからの

物語を書集前後の

ふつ、かなるを其俣に

不埒物かたりと題して「序」ウ

拙き筆をとりて七巻と

なしぬ誠に古知の作書

術数は言説の当理

むべなるべし是はまた

身の甲に似せての

愚文なれば廣才の人々

識る事なかれ」序2オ

武陽之隠士

南啓堂梅翁著

印 印（當榮）

梅隣堂

玉泉 印「序」2ウ

不埒物語卷之一

○黒繩王位を讓せ給ふ事

附 十王の事

○三悪の都 普請の事

○閻魔御即位の事

附 移徒の事

齋日の事

○大王御酒宴の事

附 餽鼻三國物語の事」3オ

（半丁空白）」3ウ

黒繩王御位をゆづらせ給ふ事

夫故人曰其身直而影不屈

政 糺而無亂國云々爰に一百三十

六地獄の惣追罰けうくわん大王に八代黒繩

大王と申奉るは政道たゞしくましますゆへ

死出の山に吹風枝をならさす血の池の波靜  
にして罪人の訴もなく日出たき大王にて

わたらせ給ふしかるに王子十人おはします」4才

第一の王子は秦廣王第二は初江王第三に

宗帝王第四に五官王第五の王子を烟魔王

第六變成王第七泰山王第八平等王第九

都市王第十転輪王と申奉りて是を 則

十王と称し中にも第五の王子烟魔は。と

りわき御愛子にてわたらせ給ふある時父大王

の御前へ王子達を初めとして左右の大臣

俱生臣觀日躰鼻両大臣その外家子郎等を

召れ勅定ありけるは我いやくしくもけうくわん王」4ウ

より今八代のあとをたれ萬鬼のまつり事

おだやかにして獄卒罪人のあらそひもきかず

七宝蔵にみちみり此うへの望なし功なり

名とけて身しりぞくといへる古人の言葉に

まかせて我か金冠を烟魔に譏惣追罰と

なし残り九人の王子どもへは六道錢十萬貫を

宛行べししかるうへは萬事炎戸が下知を請

昼夜油断なく決断所へ相詰罪人の輕重を

不埒物語翻刻

糺しずいぶん忠勤をはげむへしとの綸言」5才  
ありしかば俱生臣を初めとして伺公の面々

勅定のおもむきつ、しんでうけ玉りおのく

同音に是はめてたき御事かな九王子達の

御事も録十萬貫の御分地とならせ給ふ

うへは何の御ふそくかあらん元來炎魔様の

御事は御年齢と申し御器量御骨柄

すぐれさせ玉ひ御眼力つよくましくして

三界の善惡唯一目に見ぬかせ給ふべし

かゝる王子様にてわたらせ給へは惣追罰の大王と」5ウ

あふき奉りてあつばれなるへしと恐いりて

奏しければ大王御感甚しくさあらば

なんじらよきにはからふへしとて御簾の

中にいらせ給へはおのく悦びのまゆをひ

らき吉日をゑらみて近々御即位ある

べしとて宿所くへ帰られしは

ゆ、しかりける事ぞかし

三悪の都新殿普請の事

斯て御末の御弟転輪王の御屋形へ御連」6才

枝を初めとして俱生臣見るめかぐ鼻両大

臣各々參會まし〜て御即位の良辰

又はいづれの御殿へ移し奉らんと面々

評義まぢ〜なり御舎兄秦廣王仰ける

やうはまづ〜御即位の吉日を撰む事

おつてそのさたあるべしとかく此たびは

あらたに御殿を飾新殿へ移し奉りて

御即位の規式執行へし去ながら方角

地形いづれの地かよろしかるへし各々」6ウ

いかにとの玉へは時に饜鼻す、み出て申やう

幸成かなよろしき地あり死出の山の谷中

よりほそくながる、ながれのすへさいの川原に

つゞきてかう〜たる景地あり殊更此所に

名井ありて水の清浄なる事水昌の

ごとし此地はむかしより地蔵の領内たりと

いへどもいまは地ぞうも此地に住ずしてさいの

川原にちいさき草庵をむすびてあるか

なきかのすまひのよしなれば此地を地蔵に」7オ

乞請此ところに新殿を建立すべし此義

いか、と申しける見るめの大員申やうさりながら

地蔵を他方へつかはさん事西方へのきこへも

いか、なれば此たびかれにはすこしき別殿を

しつらいてさしおかれは浄土のとりさたも

よろしかるへしと申ければ皆一同に尤々

さあらはかの地くつきやうなりとてすてに新殿

宮殿繪圖差圖ごと〜調ければ三悪

六道ぞ、めきわたつて居石柱板瓦釘鉄物」7ウ

其外糶米置建具にいたるまで三悪城下の

貴賤となく我も〜と我慢をおこして

まけじおとらじ車に積て牛をかけかね

たいこを打ならし六道せばしとさ、げ物毎日

引もきらざりけり扱又賤の賤の敷は思ひ

おもひの装束して鋤鋤を携て罪人を

落しいるへき穴を掘やら埋やら辱も差

別もなかりけり又その中にも足よはなる

老若男女ひとつになつて手々に小ざるや」8オ

8ウ9オ挿絵

もつこにて赤土くろつち泥まひれ持はこび

つまかさね地形をならす声々に千本つき

のその声はさながらうんかのごとくなり爰に

またその名三悪にかくれなき死出の山の手に

あほうらせつといへる富貴のものかれめは

いまた一しなも猷せざる所に此たび地形

樁突の御ためとて鉄棒千本車につみて

いかめしげにこそひかせたり此ときの鉄の棒

今にいたりてながく罪人呵責のためとなる事は「9ウ

あつはれきたいのさ、げ物やと目をおどろかす

ばかりなりさてもそれよりも段々つまかさね

たるその土は高き事百丈ばかりの山となる

此山にも槐檜樵柀我もくと植ければ

枝をたれ葉をならべたちまちへんじて劍と

なる是によりていまの世にいたるまで劍の山

とぞ申ける斯てその高さ十由旬の

玉樓新殿きらひやかに地蔵のくうでん

美を尽しことくと終りしかば朝日に「10オ

か、やくばかりなり

炎魔大王御即位御移徙の事

干時炎王元年正月十六日王子移徙なし

奉り則炎魔大王と尊号し百くわん

けいしやう敬ひたてまつり速近の諸侯珍物

さくわんさ、げける大王悦感限りなく

不埒物語翻刻

さて勅定ありけるはこん日最上の吉日なれば

此後此日をもつて齋日と名づくべし今日

朕が即位のしうぎとして地獄餓鬼畜生「10ウ

の三悪を残らず一日一夜かあいだいかなる大罪人

たりといふともかしくを免許あるべきよし

偷言ありしかば俱生臣うけたまはると

筆おつとり鉄札のおもてに偷言のおもむき

逐一に是をした、めて速疾鬼といへる外道に

わたされければかしまつて候と粟飯か

しくそのほどに一百三十六地ごく裏々地借

店借まで残さずもらさずふれまわれば

獄卒罪人ぐその鶴の声々いちがんの亀「10の15オ

も浮木にあつかるかごとくふしぎなるかな

か、るめでたきくわんゆうの御代に生れかく有

がたき御下知かなとぎ、めきわたるこゑくに劍

の山も動くづる、ばかりなりさてそれよりも

獄卒罪人ひとつになつて野がけ敷入たもと

ゆたかに初けしきおさまる国のしるしなり

大王御酒宴の事

斯て大王は焦熱殿に御幸ましくければ百官



万鬼袖をつらね異儀をたゞし席をもふ」10の15ウ  
けてなみいたり大王の御前には四季のほうらい  
のしこんぶこくどのくわしにいたるまでさしもに  
ひろきせうねつてんひざをいるべき所もなし

時に大王御かわらけをはじめ給ひしだい／＼に  
小車の種々のゆふらんおもしろやつわもの、  
まじはりたのみある中の酒宴かなとうたひ  
かなで、ことぶきけり爰に藤原の右大臣

鯁鼻す、み出て玉座にむかひしやくとり直し  
つつしんで奏しけるは誠に以て君此たびの」16オ  
16ウ17オ挿絵

御即位千秋萬歳限りも御さなく目でだき  
御事言説につくしがたし去なから今君は  
三悪六道の惣追罰大王の御位にして

御威光六道にか、やき草木もなひくと申せとも  
誠に国あつて禮なし礼あらざれば義もなく  
信もなし抑々天竺まかた国の御あるし淨梵

大王の御子しつた太子と申奉るは十九才の春  
御位をすへり金銀財宝にもかへかたき五天  
竺にならひもなきやしゆたら女といふ御臺所の」17ウ

妹背をふりすて西てんぢくりやうしゆせんといふ  
おそろしき獅子のすむなる山に登てあら、といへる  
仙人を師匠とたのみ十二年がそのあいた難行  
苦行の功をつみ大聖釈迦牟尼といふ佛と

なりて因果の道理をわきまへあまねく十方  
の衆生へ生死ねはんといふ事をおしへて  
是を仏道といへり又唐にては伏羲といへる人  
五行八卦といふ事をおしへ神農は草をなめて

五つの味をさとし五臓に徹して人の病を」18オ  
いやす事をおしゆ又皇帝といふ人は五ぞう  
六腑といふ事を能かんがへて是は則病のやどる  
所にして一身の気機は柔筋のことく

なりと人におしへて是を醫道と名付さふらふ  
その、ち老子孔子孟子など、いへる人々出生して  
前々よりのおしへ五味五行五臟八卦の道段々と  
工夫をめぐらし仁義禮智信といふ文字と  
なし此五つの文字は人々の常なりとて

是を五常と名づけたり又忠信忠恕といふ」18ウ  
事を人にしめす忠の一字のりくつを以て是を  
いふ時は主につかふまつるに身命をおします

禮をもつはらとして義をはげませよといふ  
事なり釈迦は是を不借身命と説りまた

信の一字は朋友によく交老たるをうやまひ  
幼少を愛しかりそめにも偽へつらへる

事なきを信といふ恕とはおのれにほつせざる  
所を人にほとこす事なかれ忠は是物に對し

恕は私にあらす人をもつて人をおさむるなど、  
19 才  
おしへ是を則備道と名付又は律義末法とも

いへり故に近年王祥孟宗郭巨など、  
いへる廿四人のまれもの出てその母をやし

なはんためにひとりの子を穴におとし殺して  
此子のむべき乳味を母にたてまつりて養育

子を埋まんとて穴を掘ば忽黄金の釜を掘  
いだし家富榮て母をやしなふ又老人はその父

老ほれて寒中にとりたての筭をくらはんと  
ねだる倅の孟宗も此大雪にいかゞとは思ひながら」19ウ

父のねがひのもだしがたくて箕笠打着て  
竹の林にゆきて見ればふ思議や牛角のこたく

なる竹の子を式本みつげうれしくおしいたゞ  
きとりてかへり是をあつものになして父に

くらはすればたちまち病平癒する又氷をた、け  
ば堅凍のうへに魚おどるおのく父も父たり

子も子たり是もひとへに老孔孟子の教への  
ごとく律義末法をよくまもりしゆへにかやう

のまれものもあるなりさてこそ今の世に」20才  
いたるまで廿四孝と申はかれらが事をもうし

さふらふ扱日本国にては天竺の佛法唐の  
五常律義末法をひとつにくりあわせて

ひらがなといふ文字になをし大に和らぐと  
書て大和の国とよめりされはこそ大和国は

大日本の中央と定め神明和光正直の道を  
たて是を神道とは申候なりしかるに此三悪に

おゐては道もなく法もなしかるかへに餓鬼  
畜生国とさみすなんぼう口おしき事には」20ウ

おほし召されず候やおそれ入つてぞ奏しける  
大王しだいを聞き召れ汝か申所至極せり此うへは

ともかくも汝にまかすのあいだいづれの道  
なりとも宜しく建立いたすべしとの勅定

なりしかばかく鼻大臣うけ玉り有がたしく  
家のめんぼく此うへやあらんと敬ひ退出

なしにけり  
卷之壹終

「21才

不埒物語卷之二

○三悪に敷嶋の道ひろむる事

附り 和歌物語の事

大王詠吟の事

○不埒根元の事

○三途川原遊女町の事

附り 高尾娑婆物語の事 1才

(半丁空白) 1ウ

不埒物語卷之二

三悪の都に敷嶋の道廣むる事

其後大王の御前に鞆鼻を召れ勅定あり

けるはそもまづ汝は此三悪におゐていかなる

道をと立て丸か心をもなぐさめんとは

思ふぞやきかまほしさよとの倫言あり

しかばかぐはなの大臣つゝしんでうけたまはり

さん候此たび此三悪におゐて敷嶋の道と

申事をとりたて男女ともに歌道にいれ候へは 2才

真意柔軟めりとおそれ入てぞ平伏す大王

此よし聞し召れさてその敷嶋歌道といふ事は

いかなるすじを申そぞやかたれきかんとの御定なり

不埒物語翻刻

かしこまつて候としやくとりなをしいち〜次第

を演にけり 抑 此敷嶋の道と申奉る御事は

大日本国におゐて崇神天王大和国磯城の

瑞籬にの宮にまし〜て御代をしらしめす

事六十八年めてたき御代のためしをひいて

此御代をいわる奉り敷嶋の道とは申候なり 2ウ

歌は君のしろし召みそなわし給ふ道なれば

哥道ともいへりされば大内をも百敷とは

いわる申候なり百はお、きと申スこゝろなり

又百敷は百官の並敷居大内なればかくは

申スとの説も候なり往昔雄略天皇の御時

までは百官けいしやうといふ事さだまりし

事も御座なく崇神天皇より此かた

百官さだめられしと候なり万葉集といふ

文には百師木とも書又百城 毘ともかきて 3才

是をも、しきとよませ申候なり是までは

たしかにそれと定りし文字もなく唯文字

にか、わらずこと葉の花の国なるゆへに磯城の

宮の目出たきためしをひきていわる 奉る

といふ人の心のおろかしきがすくに日本の風

俗にして是ぞ誠に正直国又文字にか、はり  
字儀をたゞし利にか、はるをは唐の教と

申候て歌道には用ひ申さず只すら〜と

人の心のすなほなるをとりて三十一文字を「3ウ

つらねて是を和歌と申候なりそのうへ哥に

六義有是は則六道のちまたに定おきて

六つの色をあらはすものなり上句下句と申ス

事のさふらふなり上句は十七文字是を又

五七五の三だんとなす下句は十四も七も七

七も七二つにわか上上の五も七は天地の四方

中央の五行となし中の七も七七曜破軍に

かたどり下の五も七は五たい五輪又は五常の道

となすさて又下の句にわたりて上の七も七七難」4オ

即滅下七文字は七福即生是をあはせて

三十一文字の詠歌とは申候なりいま人代に

およんで長歌短歌旋頭混本のたぐひさ

まぐありしかれども今日本國も物ごとに

しやれと申スことを好てくだんの詠歌のみそじ

ひともしをつめて十七文字となし是を發句

と名附もてあそび候となり春は霞梅柳

花の中の鶯夏は卯の花ふじの花山ほど、きす

の一声よりして秋の蟬の声萩萩薄」4ウ

虫の声々もみちふみわけ鳴鹿の山より

いて、山に入ル月を詠て歌を讀冬はこ

がらし時雨降あられみぞれに雪

氷炭籠のけふりまでいづれか和歌

俳諧のたねとならざる事はなしと

べんぜつあざやかにこそはのべたりける

大王を初めとして一座の面々感に絶

てぞ見へにける時に大王いち〜しだひを

聞し召れさて〜汝は聞しにまさりし」5オ

廣才のものかな誠に〜爰をもつて

歌人はいながら名所を知るとはいふなる

べし去ながら汝何としかかやうの日本の

風義をばつたへ知りたるぞやきかまほし

やと勅定あるその時大臣申スやうされは

にて御座候いにしへ御父大王御即位の

御に大日本國におゐて哥道の達人その

聞へありし北面侍に左藤兵衛尉則清と

申スものいさ、かの事により浮世を捨て」5ウ

墨染の身となりその名を西行といへりかれ姿  
婆の縁つきて此界に來りし折から此法師の罪

の輕重決断まぢくにして決定なしがたくお

ほし召れしはらく某が父に御預仰附させらる

其比某若年ゆへかの法師に朝暮念比に給仕

いたしいたわり候によつて歌道のひみつ物がたりなど

いたしそのうへ一卷の書をとりに出し是は哥道の

深秘和歌の大事三鳥の傳受なりとて某に

相傳申候此ゆへに敷嶋の道と申事もくわしく」6才

6ウ7才挿絵

ぞんしざふらふなり又發句俳諧と申事は凡

今年百年程いぜん俳諧の大祖貞徳と申す

ものかれも此土に來りし時先例をひかせられ

某方へしはらく御預け下さる是によりて私宅に

相ともない時く發句のしだひ俳諧の付合切字

打越去嫌ひてにおはなと、申す事の大事を

つたへ申候といへとも時至らざればはまた此事知る人

なし今時至りて大王の御前におゐて憚も

なく演所のしたひ斯のことに御座候と奏し」7ウ

ければ大王よしを聞き召れおもしろしく是にてさ

不埒物語翻刻

とりのむねのひらけたり幸今日最上吉日移徒

といひ斎日といひさあらは汝哥にもせよ發句にも

あれしうぎにはやく一ツ仕れとの偷言にて御機嫌

甚うるはしくゑつほにいりてそ見へにけり驥鼻

其時しはらく思案し

齋日はむけんの釜もぬるむかな

御慶といふてとんた人魂

妙のはるうてんりんゑの罪消て」8才

かやうに仕是を發句脇第三と申候と恐入てそ

奏しければ大王悦感浅からずしからは丸も一首

和歌をつらぬべし悪敷は汝直てくれよ

いまより後は師と頼べしとの偷言驥鼻大臣

身にあまりての有がたさになみだもこぼる、

斗なり大王しはらくあつて何とこふもあろうか

地獄とてよそにはあらしむねのうち

われとのりゆく火の車かな

とあそばしければ觀目の大臣とりあへす」8ウ

七五繩と呵責の繩を引かへて

我が住宿のはるぞめてたき

と詠じければ一座のめんく声々にあつばれ

時の歌人<sup>かじん</sup>やと各々<sup>おのくろやま</sup>敬<sup>か</sup>ひ感<sup>かん</sup>しつ、唯<sup>ただ</sup>呑<sup>の</sup>々と

大<sup>おほ</sup>さわぎ昼<sup>ひる</sup>夜<sup>よ</sup>をわかたざりけり

不<sup>ふ</sup>埒<sup>らち</sup>根<sup>こん</sup>元<sup>げん</sup>の事

されはにやまよふべきは色<sup>いろ</sup>なり又まよはされまじきは

色<sup>いろ</sup>なり吞<sup>の</sup>へきは酒<sup>さけ</sup>なり又呑<sup>の</sup>れまじきは酒<sup>さけ</sup>なりと

いへり炎<sup>えん</sup>王<sup>わう</sup>酒<sup>しゆ</sup>宴<sup>えん</sup>のあまりに鬼<sup>おに</sup>が娘<sup>むすめ</sup>の十<sup>じゅう</sup>郎<sup>らう</sup>姫<sup>ひめ</sup>を中<sup>ちゆう</sup>宮<sup>ぐう</sup>に」9オ

たて、色<sup>いろ</sup>にふけり春<sup>はる</sup>は死<sup>し</sup>出<sup>し</sup>の山<sup>やま</sup>のさくらに

日<sup>く</sup>を暮<sup>くら</sup>し夏<sup>なつ</sup>は三<sup>さん</sup>途<sup>ず</sup>の舟<sup>ふね</sup>遊<sup>あそ</sup>びに三<sup>さん</sup>重<sup>じゆう</sup>の

ちりばめたる安<sup>あ</sup>方<sup>ほう</sup>丸<sup>まる</sup>といふ大<sup>おほ</sup>楼<sup>ろう</sup>船<sup>せん</sup>に三<sup>さん</sup>重<sup>じゆう</sup>の

臺<sup>うてな</sup>を飾<sup>かざ</sup>らせ古<sup>こ</sup>渡<sup>わたり</sup>の錦<sup>にしき</sup>をもつて幔<sup>まなまく</sup>幕<sup>まく</sup>を

張<sup>はり</sup>水<sup>すい</sup>主<sup>しゆ</sup>梶<sup>かぢ</sup>取<sup>とり</sup>いるひ異<sup>い</sup>形<sup>ぎやう</sup>の獄<sup>ごく</sup>卒<sup>そつ</sup>どもに皆<sup>みな</sup>みな

いちやうの虎<sup>とら</sup>斑<sup>ふまめ</sup>染<sup>ぞめ</sup>の装<sup>そう</sup>束<sup>そく</sup>ろびやうしをふませ

声<sup>こゑ</sup>を揃<sup>そろ</sup>へてやんらめてたをうたはせ其<sup>その</sup>外<sup>ほか</sup>

あらゆる藝<sup>げい</sup>者<sup>しや</sup>をあつめ義<sup>ぎ</sup>太<sup>たい</sup>夫<sup>ふう</sup>豊<sup>ぶん</sup>後<sup>ご</sup>時<sup>じ</sup>流<sup>りゆう</sup>唄<sup>うた</sup>

松<sup>しょう</sup>坂<sup>さか</sup>こへた音<sup>おん</sup>頭<sup>とう</sup>と音<sup>おん</sup>曲<sup>きよく</sup>三<sup>さん</sup>味<sup>み</sup>線<sup>せん</sup>琴<sup>きん</sup>鼓<sup>こ</sup>弓<sup>きゆう</sup>」9ウ

こわいる物<sup>もの</sup>まね色<sup>いろ</sup>々にうかれ玉<sup>たま</sup>ひて昼<sup>ひる</sup>夜<sup>よ</sup>の

わかちもなく大<sup>たい</sup>酒<sup>しゆ</sup>淫<sup>いん</sup>乱<sup>らん</sup>限<sup>げん</sup>りはなし俱<sup>く</sup>生<sup>せう</sup>臣<sup>しん</sup>

を初<sup>はつ</sup>めとして連<sup>れん</sup>枝<sup>し</sup>の面<sup>めん</sup>々<sup>々</sup>観<sup>かん</sup>目<sup>め</sup>驥<sup>き</sup>鼻<sup>び</sup>

両<sup>りやう</sup>大<sup>たい</sup>臣<sup>しん</sup>さまくいさめ奉<sup>ほう</sup>りしをかゑつて

御<sup>ご</sup>勘<sup>かん</sup>氣<sup>き</sup>をかうむりあるに甲<sup>か</sup>斐<sup>はい</sup>なきふ

ぜいなり爰<sup>こゝ</sup>に又<sup>また</sup>大<sup>だい</sup>王<sup>わう</sup>の御<sup>ご</sup>物<sup>ぶつ</sup>に寵<sup>てう</sup>尻<sup>しつ</sup>といへ

る小<sup>こ</sup>姓<sup>せい</sup>あり生<sup>しやう</sup>年<sup>ねん</sup>つもつて十<sup>じゅう</sup>八<sup>はち</sup>才<sup>さい</sup>生<sup>せい</sup>れつき

うつくしく心<sup>こゝろ</sup>ばへもよく朝<sup>あさ</sup>暮<sup>ゆふ</sup>ふた心<sup>こゝろ</sup>なく

大<sup>だい</sup>王<sup>わう</sup>に仕<sup>つか</sup>へて御<sup>ご</sup>そはさらずある時<sup>とき</sup>てうこう」10オ

つくく心<sup>こゝろ</sup>に思<sup>おも</sup>ふやうさてく大<sup>だい</sup>王<sup>わう</sup>の御<sup>ご</sup>身<sup>み</sup>もち

中<sup>なか</sup>々<sup>々</sup>もつてほうらつ千<sup>せん</sup>萬<sup>まん</sup>其<sup>その</sup>本<sup>ほん</sup>乱<sup>らん</sup>てすへく

の御<sup>ご</sup>仕<sup>し</sup>置<sup>おき</sup>おさまる事<sup>こと</sup>はよもあらじ何<sup>なに</sup>とぞ

御<sup>ご</sup>いさめを申<sup>まを</sup>あげんと思<sup>おも</sup>ひつくよりも装<sup>そう</sup>束<sup>そく</sup>

あらため花<sup>はな</sup>やかに出<sup>い</sup>だちて大<sup>だい</sup>王<sup>わう</sup>の御<sup>ご</sup>前<sup>まへ</sup>にかしこまり

謹<sup>つしん</sup>で申<sup>まを</sup>けるは斯<sup>かく</sup>申<sup>しん</sup>上<sup>じやう</sup>候<sup>こう</sup>は、定<sup>さだめ</sup>て某<sup>それがし</sup>悋<sup>しん</sup>氣<sup>き</sup>の

やうにもおほしめさせらる、御<sup>ご</sup>事<sup>じ</sup>も御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>

あるべけれどままつたくさやうの御<sup>ご</sup>事<sup>じ</sup>にては

御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>なく候<sup>こう</sup>おそれながら君<sup>きみ</sup>は三<sup>さん</sup>惡<sup>あく</sup>の惣<sup>そう</sup>追<sup>つい</sup>罰<sup>ばつ</sup>」10ウ

の御<sup>ご</sup>身<sup>み</sup>として十<sup>じゅう</sup>郎<sup>らう</sup>姫<sup>ひめ</sup>の色<sup>いろ</sup>にまよはせ給<sup>たま</sup>ひて

御<sup>ご</sup>まつり事<sup>こと</sup>もたゞしからず昼<sup>ひる</sup>夜<sup>よ</sup>をわか

たず色<sup>いろ</sup>と酒<sup>さけ</sup>のふたつに御<sup>ご</sup>心<sup>こゝろ</sup>をいためさせま

しますゆへはたして国<sup>くに</sup>をみたさせたまはん

御<sup>ご</sup>事<sup>じ</sup>おそれながら鏡<sup>かがみ</sup>に移<sup>うつ</sup>し見<sup>み</sup>奉<sup>ほう</sup>るが

ごとしせん国<sup>くに</sup>家<sup>か</sup>をうしなひたまはせ候<sup>こう</sup>は、

御<sup>ご</sup>先<sup>せん</sup>祖<sup>そ</sup>代<sup>だい</sup>々<sup>々</sup>御<sup>ご</sup>父<sup>ふ</sup>上<sup>じやう</sup>へたいし奉<sup>ほう</sup>りての不<sup>ふ</sup>孝<sup>かう</sup>

不義そのうへ御いとおしみ深く思召めせらる、  
中宮様ともひとつ御枕の御そひふしも」11オ  
なるまじければよく／＼御かんべんまし／＼とて  
よいかげんに御たのしみ然るべうこそぞんし  
たてまつり候御事唯々色も酒も中崩

を御もちい御たのしみましまさば御身の  
御養生又は同家の御ためにておはしました候と  
弁舌はあきらかなりこと葉に花をさかせ  
つ、思ひこうで奏しける大王此よし聞し

召れ大のまなこをくわつと見ひらき面躰忽ちに  
朱塗のこことく額すじばり瘤々たち」11ウ

御声あら、かにて扱々おのれいまた口替もくろまず  
して我に異見は推参至極すでに俱生臣を初  
兄弟のものどもまで諫言いたすかしましたさに

おしこめてさしおくをはおのれしらずや

おのれらごとき虫どうぜんいけてそのま、

さしおくなら色をかへ品をかへ又もや外よりいけん  
諫言耳にさかふてかしましやいごの見せしめ

は見よと取て引寄腕をくつすと引ぬけは

わつとさげびてうせにけりあ、心地よや心地よし」12オ

不埒物語翻刻

12ウ13オ挿絵

是をさかなに一ぱいのまんそれ／＼とありければ  
御そば近きおなごとも三升入の大きかづき御前  
にこそ持出たり大王につこと打笑さあらば  
つげ／＼のまんとてつゞけて三ごんほされ

しは酒呑童子と申とも是にはいかでか  
まさるべしとておの／＼舌をぞ巻にけり

扱大王の御面躰額筋張瘤々だち色のあかき  
御事は此時よりはしまりて老若なんによ

おしなへてゑんまのかほのあかつつらとは申なり」13ウ

三途川原遊女町とりたつる事

斯ていさむる臣下もなくあまつさへ数ならぬ氏

も筋目もなきやからを段々引上百官の

上にて、国の政道罪人の軽重まで

汝等宜敷はからふへし頼む／＼と大た

わけ埒も性根もなかりけり斯て段々

私用を重し公務を掠まいないもつはらに

とりおこなふゆへ善も悪もさだかならねば

今はひとへに天照御神の高天原にて岩」14オ

戸の中にいらせ給ひ日月の光なきがごとく



大不埒とぞ成りにけり娑婆の縁つきて冥途に  
 来る遊女ともこと／＼く集置三途川原に  
 新吉原と名附て五町四方に町どり大ニ階に  
 格子造り夜見せのあんどんてんにか、やき  
 三筋の糸にてすが、き引たて其外尺八琴鼓弓  
 引たてすりたて玉子／＼と呼声にうかれぬ  
 ものこそなかりけるさればにや爰にあわれを  
 とゞめしは娑婆にてもその名もたかき」14ウ  
 高尾とい、し全盛ならふかたなきの生れ  
 つき美しく楊貴妃李夫人もかくやと思ふ斗  
 糸竹の道はいふにおよばす連歌俳諧その外  
 諸藝くからすといへどもすぐせいかなる  
 悪縁やらためしすくなき川竹の身と  
 うられ来てうきふししげき流の身と  
 なる前の世のむくいまで思ひやられて朝な  
 夕なになげき悲しみいかにしてか此身を  
 うかべ重き罪科ほろぼして早く悪所を」15オ  
 はなれたき事かなと明暮朝日によらい様へ  
 御たのみもふし又は鬼子母神様もおねがひ  
 もふし唯ひとすじにねかふ心のしるしかやある

夜宵よりしよほ／＼小雨も降つれ／＼なる  
 折ふしに醫師とも見へつ法師なりける  
 お客のひとりまかきのもとにた、すみ給ひて  
 我にひと夜の仮枕ゆるし給へとの給ひて  
 立入給へはそれよりもあいそめ川も深くなり  
 である夜のむつことに此御客のあふせには」15ウ  
 いかに太夫聞給へ斯打とけて逢事もひとへに  
 すぐせの縁ぞかしさらは何とてつ、みたまふや  
 とふやらそもじのかほつきは思ひありげに見ゆる  
 ぞやつ、まずかたりたまふべしといとねん比に  
 とはせたまふさては思ひうちにあるときは 必  
 色にいづるとや今は何をかつ、み申候べし  
 まつたく恋慕のやみにまよふにあらざたま／＼  
 うけかたき身をうけながら斯浅ましき流の身  
 さなきだに女の身は五ツの障のあるゆへにうかむ事」16オ  
 かたしとかやあまつさへ斯御たづね下さる、御かた様の  
 御姿をよく／＼見奉れば勿躰なくも佛の  
 みでしとうとくこそは見へさせ玉ふ御身をも  
 けがしまいらせしくやしさを何とぞして  
 かやうなる罪とがの消もやすらん事をのみ明暮心に

おもふのみそれゆへにこそ氣もおもく顔にあらはれ

さふらふそや此うへの御情に仏の縁ともなり

まいらせん御事を御おしへ下されかしとなみだを

流し語りければ其時お僧さてもそもしは」16ウ

さすがなり今は何をかつ、み申べし我はまことは一所不住の

法師なり色即是空煩惱菩提心やすくおほしめせ

かならず罪障消滅して佛果に至り給ふべしなかんづく

女人成仏うたがひなき經文をさづくへし一者不得作

梵天王二者帝釈三者魔王四者轉輪聖王五者

佛身云何女身速得成佛何疑のあるべきぞ

ひとたびの此の經を聞又はどくじゆめさるゝものならばたとひ

いか成罪深き流の身なりとも成仏せすといふ事なし唯

頼めたのもしや多年そなたの志まことありける」17オ

ゆへにより仮初ながらうかれきてそなたと枕をか

せしなりなをく行すゑまもるへしかならずうた

がひ玉ふなと夜もすがら御けうけに東雲もあけ

わたり灯火ともろともにかい消て見へ給はすあまりの

事のふしきさに爰やかしこと見てあれは枕のもとに

一首の和歌を残し給ふとりあげ見れば

うたがわで今こそ頼めいつはりの

不埒物語翻刻

なき世はのりのまこと成りけり

かやうの御歌を拜し有かたくも感涙肝にめいし扱は」17ウ

うたかひもなきお佛様の御おしへと思ひぶかくとうとみ

さづけ給ひし御經文あけくれ心におこたらずとなへ

て娑婆の縁つきはて此界におもむく鹿嶋立

のその口からはるくの一ひとりたびきのふ爰にき

たるまで姪しやゑんまの帳もはやく消すぐに

浄土へゆかふぞとおもふた所に思ひの外いま

大王の色にふけりて善をも悪をも打込に情も

しらずどうよくや永々娑婆にてあきはてたるつとめ

を又もや流の身思へはくうらめしやとなみだの」18オ

雨のおやみもせでついには両かんなきつぶすふし

ぎやなたれしらぶるとは見へねども琴の音

しんくくと松風にひゞき空燒の香ほりたもとに

薫じたちまち両がんひらきあまりの事の姪し

さに四方のけしきを詠むればこくうに花ふり

音楽聞へ異香みちく紫雲の中よりしやば

にて逢しお客のぼう様こつせんとあら

われ給ひ高尾か手を取大門口をそつとぬけ西の空へ

ぞゆき給ふ有かたかりける次第也 卷二終」18ウ

三五

不埒物語卷之三

○三悪道繁栄の事

附り 茶道姪鬼坊が事

○葬隕川原の后皇大王へ異見の事

懐の事

附り 后皇詠哥の事

三国の例をひかせ給ふ事」1オ

(半丁空白) 1ウ

不埒物語卷之三

三悪道繁栄の事

爰に大王の御側近き茶道に姪鬼坊といへる

ものありかれに高尾を御預けなされ候所に

高尾の君行衛しれずになりければ大きに

おどろき大王の御前にかしこまり扱も夕し

高尾の君を何ものかさそひ出して候やらん

大門口をもきひしくせんさくいたし候へとも

さらく行方相しれ申さす候此うへいか成」2オ

うきめにあふせつけられ候ともぜひに及はぬ

御事となみだながらに奏しければ大王此

よし聞し召ればれやくたいもない事かな

何もの、しわざぞやむねん千萬高尾はあつ

はれ此里のたて物にして我等がたのしみ第一の

君と思ひしにゆだん大てきしてやられたは

ぜひもなし去ながら汝ずいふん心をくだきて

たづねよと唯一通りの御しかり姪鬼坊は思ひ

の外にわにの口をのかれ有がたしくとそうく」2ウ

退出したりけりされども日々いやましに死くる

遊女哥びくにおどり子わたつみ山ねこ野郎

みなことぐくとめ置全盛の太夫格子さん

ちやつほねにいたるまで月見花見はゑんまの

諸役人物日通ひしゆら王の居つかけかしこの

新ぞう爰の突出袖とめの蒸籠山をなし

春にもなれは家桜さて文月は門々の折

かけ灯籠いろくに二どの月見の臺の物

す、き生けりむさし野々月をいだして」3オ

夜見せのすが、きてんつるてんと大門に市

をなしゑいとうく山のごとし六道の辻の

よたか三途川の舟まんぢう色と欲との

相の山には哥びくに無銭のやからをす、

めいたらしむる事さながら菩薩の蜘蛛

供養のごとく日々にわうへんして

無銭のともがらに五戒をさづけその外

山ねこわたつみよびだしなんと、姿を現じ

むりやうの方便の手くだをもつて上品」3ウ

上郎屋の二階に至りがたきぶすいやはたちの

ためには四十八手の奥義をほどこしさて

又辻々端々つまりくの辻八卦手の筋

見るは銭いらす見せ物からくり中とびれん

まん一本竹に綱わたり鞠独楽しなだま

おてゝこてんとおそろしき劔の山にて生捕し

山あらしといふ生た猪銭はもどりじやくと

うそのかわのたいこをたゝき哥さいもんに

こさう三味線やつこはよだれをたらすやら」4オ

4ウ5オ挿絵

婿こくたいもなかりけり又かたはらにしゆら

道の兵法つかひ餓鬼道の煮うちや屋

一ふく一せん大和茶屋楊枝はみがきはの

薬 山賣名方反魂丹疝氣の妙薬一代

根を切腕をきる是か違ひのあるならば

八万地ごくへおつべしとそらせいもんに

ばかざる、は鬼神に横道なしとかやその外

町々御評判松の緑の大白ねり甘事のおやかた

なり又は新道廣小路女郎買指南の講釈」5ウ

掛棊双六辻ほう引お花こんべい金五三まひ

けんねんじ夜講釈には志道庵けいせい

禁断義には有かたき女道門又はかけまの

いきちまであまねく十方に説てきかすれば

牛頭女頭くわんぎのなみだに袖をしぼり

ゆやくのねんに角を落し前代みもん

獄卒の嫁入智取吉原通ひの辻かごは

三挺壹歩でおせさつさと三つ羽のそやを

躬のごとし其外舟宿たいこ持六道の」6オ

繁栄地こくの銭もふけ讀賣評判時流

うた天下泰平此時ぞと貴賤上下の

大そ、りそ、りたちたる諸役人なにかわ

もつてとまるべし此間も大罪人四五百人も

とりにがす又大善根の種を蒔し大善人を

地獄へやるやらおとすやら諸役人の鼻屑

沙汰色と欲との引張合地ごくのさたも金

しだひとむかしの人のいはれしも今こそおもひ

知られける兎角遊ひはいらぬ物銭をためるが」6ウ  
 かんじんと命にかへて持もあり武朱と菅歩  
 の才覚に鑑がつまつて無理心中とでるも  
 あり是ぞ誠に大ふらち極腹筋のつる

ほどこそおかしかりける事ぞかし

葬隕川原の后皇大王へいけん的事

傳へ聞孔子は鯉魚に別て思ひの火を胸に焼  
 白居易は子を先立て枕に残る葉をうらむ  
 是皆仁義禮智信の大祖文道の祖師

たり恩愛の悲しみ左の通りいはんや女性」7の10オ  
 爰に大王の御母葬隕川原の皇后炎王の御身

持いつしか大ふ埒と成りて国のまつり事も取  
 うしなひ 剰 三代の臣下国家の政道をもい

たすへき両大臣を初め兄弟の者共まで

みなく押込心のまゝの振舞そのうへ筋目も  
 なき下臍までついせうけいはくのものをば

大録をあたへ匹夫下劣の鬼か娘のみめよきに  
 ほだされて中宮にそなへかれらが一族兄弟

にいたるまで高位高録となして国の」7の10ウ  
 まつり事をまかするゆへに普代相傳のものは

いきとをる事劍の山のごとくにして炎王を  
 恨 山林に隠る斯おそろしき世の中に

しぜん西方又は外国のゑびすなど一鬼お  
 こりて王位をくつかへさんもはかりがたし

若もさやうの時節に至りては筋なき

もの、かなしさは文武弓箭の道といふ

事をしらざるゆへふせぎ戦ふちからもなく  
 金と命のおしさのまゝ早く敵陣に降て大王の」11オ

讎となるへきは鏡にかけて見ゆるなり何とぞして  
 諫言をもなさばやおぼし召ある夕暮ること

なるに御母の后皇炎王の御殿へ御光りん  
 まし〜四方山の御物がたりいつ〜よりも

御きげんうるはしく御ふところの中よりもひ  
 とつの巻物を御とりいだし是〜大王御覽候へ

是は父うへの遊ばされし一字のまき物なき人  
 のかたみとなるは筆の跡また〜此すへにその

いちじの心をうけて当世はやる哥を讀て我も」11ウ  
 段々老の波筆の命毛あしたにきれんもは

かりがたし老眼ながらも筆を染たり是を  
 けふのみやげ物とおほし召はやく御拝覽

候へかしと御手づからわたさる、大王是を  
おしいたゞきおしひらきて御覧あれは誠に  
父大王の御正筆墨ぐろにへつたりと慎の  
一字の文字さてその脇よりほそくくと小野  
おつうか筆の流母うへの御手跡なり讀て

見れば哥なり〇つ、しみはたゞまことなり」12才  
礼義なり色欲酒のみつはかたきそ

大王是を御覽してにがくしき御風情

十郎姫を初めとして御側近き姪鬼坊

大王の御有様見るも中々きのどくさにみな  
青醒て見へにけるその時に后皇は三国

の例をひかせかんげんの糸口よりおた巻のはてしも  
なくいかに大王聞給へ唐の玄宗皇帝は八十に

餘りて馬鹿を尽、楊貴妃といふ女の色にまよひ  
まつり事をとりうしない国家を奪れ又」12ウ

大日本におみては義經といふ人文武二道はいふにお  
よばす詩歌管弦道そのほか中飛れんまん軽

業人のおよばぬ事までも兼備はりし人なる

ゆへ日本一の名大将といわれし身殊更兄貴は頼朝  
とて日本国の大あたま天下にひとりの兄を持

供をもつれずたゞひとり堀川といふ所より嶋原といふ  
悪所へ夜な／＼通ひ玉ひしゆへねいじん折を窺  
て兄貴のいらる、鎌倉へ逆意むほんも有やうに  
たび／＼のさんそうゆへそがさすがは凡夫なり若も」13才  
13ウ14才挿絵

さうでもあるかやとそれよりも兄弟中次第々に  
わるくなりわづかに五尺の身ひとつをおき所なく奥  
州の高館といふ所で討死したとは申せども是は  
まつたくうそなるべしあつちで死だ事ならば

こつちへこねばならぬはづさつする所が此人は天狗の  
わかしゆであつたげな羽こそなけれ飛行して常盤

とやらゑぞとやら又はうその嶋とやらへのかれた物  
と思ふぞや斯小国の大將すらせまじき物は色狂

いはんや御身三悪のあるじとしてかゝるふらちは」14ウ  
何事ぞやはたして国をうしない介六の心中枕久などの

どらものとひとつ口にうたわれんはなんぼう口おしき  
事ぞや是はおよばぬたとへなれども中天竺のまかだ

国浄梵王のひとりのむすこしつた太子といふ人は十九  
さいの春の比五てんちくにかくれもなきやしゆたらといふ

て十六になる花のさかりのいもせをふりすてねごかしに

して王宮をしのびいで、だんどくせんといふ山へよぢのほり仙人の弟子となりみとりの髪をそりおとし羅綾のたもとを麻の衣に引かへて谷底の水を汲」15才

蕨を折木の葉を抓難行苦行さんぎ百大劫をこへて大聖釈迦牟尼佛と正覚をさとり末世のいまにいたるまで衆生をさいどし給ふくどくは先祖にもむくふべし大将たる人は是かよき手本ぞやさりながらある人の漸には釈迦といふ佛はまやといひし女の脇の下から生れたともい、又善導とい、し坊主は善道といふ瀧からでた或はかんせうくは梅の木のためから生れたなど、今の世までの漸の種又は女の手から物をとれば五百生があいだ手のないものに」15ウ

生る、など、とんだ事をおしゆるのも今の世あまりに色にふけり大切のおやのゆづりの家屋敷を失ひはては心中をしてかけかへもなき命をすつるばかものともをしからんためにしやかといふとをりものが未来記を悟てい、出しけるぞや物而何ほどけつかうな事又はうま

いものおもしろい事なりとも身をうつほとにはまる事

近比ふすいくされはこそ爰を以て中庸といふぞ

かし萬事かたよらすして唯その中を用ゆる事

こそかんじんなりかたよりにて深くはまりたりくと」16才

めにも見へす千両屋敷のふたつも三つも棒につつかけ遣ひすて、おや兄弟より勘当をうけ一ぞく一家にうとみはてられた、すみもならぬてんちく浪人となり六道の辻にまよふものいしへより教も限りもなし申さすとも御せんしあるべしかやうの凡夫物事にけんやくをいたし女郎を買とても妓宇やり手

禿まではなげをよまれ金銀つかふ事はをやほとんと申そやおなし銭金つかふとも工面がだい一

女郎のみけん眞實をはやく見つけ千両も出して」16ウ

太夫をくひと根曳にしてあつちから札をいわれ末代までも名を残し我宿のみだい所とあふぎたて夫婦一連

たくせうのさとりをひらく人々こそ色道の達人なり

唯何事もよいかけんといふ事は。けつかうな。てうほうなもの。なけれども。是もあまりに。ふかいりするはいらぬ物。たゞ中庸をまもるがよし我か祖の

達磨大師といふ人は此よいかげんといふ事をさとらんとて九ねんがあいだ座禪のいつヶを

うちたまふそのゆへに口おしやばかもの、名」17才

をとりて今の世にいたるまで根付にまでは

せらるゝぞやと。さま／＼に。いけんの堤をつき  
たまへど。大王のふらち水の出花。ことさら

外より悪事をすゝめたてまつるもの

降雨のごとしついにいけんのつゝみを

おしきつて三界に名を流し給ふ

事社は悲なけれ

不埒物語卷三 17ウ



不埒物語卷之四

○西方淨土の事

附り 三悪の不埒住進有事

○勢至不動口論の事

附り 釈尊武功有事

○釋尊三悪へ討手を蒙給ふ事

附り 三字箴名号の事

不動利刃の事」目次一オ

(半丁空白) 目次一ウ

不埒物語卷之四

西方九品安樂世界の事

釋尊より炎魔不埒ちうしんの事

爰に西方十萬億土安樂世界の御あるじ

九品上生上品の都に方万里の城廓宮殿

をかまへ高さ百由旬の臺をつくらせ数の宮殿

軒をならべ四方に堀あり、八功德地、水とうくと

していさぎよし、中央に反橋を掛させ橋杭は

栴檀の巻柱に伽羅の高欄馬瑙の桁」2オ

真珠のぎほうしすいしやうの橋板朝日に、

やき橋の下には弘誓の船とて大船をうかめ

常樂我常の風吹て鴛鴦渚にねふりを

さます大宝蓮花は八万四千の花葉をつら

ね宮殿の有さまはどうばん宝蓋てんにひ

るかへし庭には金銀のいさごをちらし四季に

むりやうの花吹木の實をむすび靈香常

に薫し梢々に佛法僧の名鳥来りて

嘯り慈悲心鳥の声たへずかりやうびんか鳥は」2ウ

鞞鼓をならし又は琵琶を弾じて唄うたふ

聞人心耳をすませり農民耕事

なしといへとも百味のをんじき蔵にみち

賤の女紡績の手わざなけれども寒からず

あつからずか、る目出たき世界なれば極樂淨

土とも申スなり国王の御名をは帰命無量

壽阿弥陀佛法王と尊号し奉り御慈悲を

もつはらとして常に音楽舞曲を好

又は十種香立花などに月日をおくらせ給ひ」3オ

誠にめでたき法王にてこそましくけり

しかるに三悪のとり沙汰好事門を出ず悪事

千里を走のならないなれば炎魔のふらち

日々ちうしんやむ事なし是によつて法王の

御前にはむりやうの化佛化菩薩を初めと

して左右のぼさつ、くわんをんせいしは、如意

弗子ほつすをとりなをし宝冠ほうくわんをかたむけ 謹つしん而

奏そうしけるはさても近年きんねん炎えん色しきにふけ

りて国のまつり事をとりうしない政道せいだう」3ウ

たゞしからざるによつて善惡ぜんあくの差別さべつもなく

色しきよき女にょをは重惡ぢゆうあくたりといふともさんず

川原かわはらに廓くわくわといふ事をとりたて此所に

集あつめ置遊おきあそ女をんなと名な付づけて寵愛ぢゆうあいとなし

又また娑婆世界しあはにおゐて多年たねん法王ほふわうの御名みな

をとなへ忠節ちゆうせつをはげまし日果にっくわ念佛ねんぶつの功こう

をつみ日々にち々々十念じゆねん名号めいごうをさづかりしとも

がらまでことくむけん地獄ぢごくへおとし又は

真言しんごんふしぎの今出いまでのこうぼうともいわる、程ほど」4オ

なる沙門しゃもんには秘密ひみつの一句いっくをさづかり現当げんたう二

世よの心願しんくわん満足まんぞくをとげしやからをは落おし

穴あなへ追込おひこみながくじやうをいたさせ又日蓮にちれんの

門弟もんていをばひけを作りて奴子やつことなし盜賊とうぞく

重罪ぢゆうざいのものなりともへつらへるものをは

その罪つみの輕重けいぢゆうによらずさつそく引あげ

大録たいろく高官かうかんとなし国の政道せいだうをまかする是

によつて放埒ほうらうむざんの世界せかいとなりて子は親おやに

てきたいおやは子こどもを惡所あくじよへ賣下人うりげにんは」4ウ

主しゆを害がいし財宝ざいほうを奪取ばうとりしゆらのとうじやう

やむ事なく 刺あまつさへ 此こころあしゆらをかたらい当城とうじやう

九品くほんの浄土じやうどをけがさんとの風聞ふうぶん積尊じくそんのかた

よりも家臣かしんのれきく神通じんつう日蓮にちれんといへる

をもつて委細いさいにちうしん有り又追々おいくに阿難あなん

迦葉かやう富樓那等ふろうなとうの軍士ぐんし雲中うんちゆうの早馬はやま

くつはみをならし 訴うたなる事日々にち々々夜々やにして

さなから櫛くしの齒はを挽ひくがごとしかれらは剛敵がうてき

御油おんあぶら断たましくてはいかゞなるへしいかにしてか是こを」5オ

しづめ御しんきんをやすめ奉らん御ちほうの

程ごせつぽう御説法ごせつぽうきかまほしやとふたりのほさつは

涙なみだをながして奏そうしければ諸もろくのほさつ達たち

各おのの袖くさそでをぞしほりける時に法王ほふわうは

十由旬じゆじゆんの玉塔ぎよくたうに七宝しちほう莊嚴しやうげんきらびやかなる

玉たまのすたれの内うちにして此こよしいちく聞きし

召めれじんくみめうの御声ごこゑ高らかに仰おほける

やう我われせいざい王佛わうぶつのあとをたれ十かう正

覚のむかしより今に至て年久しく此浄土」5ウ  
 をたへせざる所に炎魔か我俣にちくくに重  
 過し国王の身としていやしき鬼がむすめを  
 ばいとり中宮となしかれが色にまよひその  
 ほか法花経の功力によつてはやく浄土に  
 いたるべき高尾といへる遊女をしはらく三途に  
 とめおきておのれがたのしみとなす又その  
 外にふ埒なる事山のごとし釈迦のかた  
 より訴なしといふとも我みけん眞實のびやく  
 がうのひかりをもつて炎戸が五臓見ぬいて」6オ  
 能しれる事は鏡にむかふがごとしかれらを  
 ほろぼさん事はかわらけをくたくよりもやすしと  
 いへともきやつは色欲のとかのみにして博奕  
 ゆすりのさたなし色欲ほんのうはほだいの  
 たねなり時節いたらばかれといふともかならず  
 善心にならざらんやと思ふ去なからあざぶ  
 なれともいち日くぐとすいぶんのかしにいたし  
 差置とはいへども今はしやかの目にだにもあま  
 りてもくれんを初めとして舍利弗等の」6ウ  
 忠臣を以てたびくの訴ことにおのくとても

慈悲心なきにあらざ一殺多生の利にまかせ  
 かれを退治する事も誠に慈悲のひとつ  
 なり此うへは是悲におよばす去なから近年  
 兵おとろへ將すくなしおのくいかにと演説  
 ある唱聞圓覚群願すといへともさらに  
 一言を演ものこそなかりける  
 勢至不動口論の事  
 其時に廿五菩薩の中よりも大勢至」7オ  
 7ウ8オ挿絵  
 す、み出て奏し給ひけるは誠に以てこれは  
 やすからぬ御事なり慈悲も慈悲により  
 玉ふべし此たびの討手の大将たれかれと申ス  
 とも釈尊ならでは御座候まじ爛魔ついとつ  
 の御倫旨とくく遊はされしかるべうこそ候と  
 謹てこそ奏しける時に不動ははるかの  
 末座にひかへたりしがくわゑんをはなちあた  
 りを拂てす、み出て申やう此たびの討手た  
 やすきにあらざ炎戸はきこゆる剛敵にして」8ウ  
 坂田の金平小林の朝比奈にもおとるまじ殊更  
 つきしたがふものどもまで異類異形にして

中々もつて、積尊何の武功もなくしてかれに  
むかはん事、螳螂が斧なるべし此たび討手の  
大将軍たるへき御倫旨は身ふせうに候へども  
某に仰つけられ候へかしとあたりに人も  
なきやうにかうげんはなつて奏しければ  
其時勢至からくと打わらいなんぞ、積尊を武  
功なしとさみするぞ、積尊の武功山のごとくに」9才  
してかぞへかたし殊更筋目のたゞしき事を  
かたつてきかせ申べし、積尊の先祖といつば  
西天竺の空中寶塔品中十六出旬御あ  
るじ多宝佛のかういんかひらしや国において  
五百六億国の御ぬし淨梵大王の皇子なり  
生まれながらにして天上天下天にも地にも唯  
独りの男さる程に文武兩道にくらからず  
文殊といへる智者を愛して、文学経論を  
さとし普賢とい、し軍者をなづけて「9ウ  
武道劍術兵法の奥義、究弓は楊由に習ひ  
馬は佐々木平馬を師として用の手綱五百六  
十三をつたへたりさればこそ、積尊十六才の春  
そのころはしつた太子とい、し時年号は法界

不埒物語翻刻

三年三月下旬の事なりしに従弟の堤婆  
達多とい、しもの王位をかたむけんとて  
我におとらぬ、旁若無人翁といふものをかた  
らい其外あまたのあぶれものをまねきあつめ  
都合そのせい十万余騎を引率して無分別の「10才  
赤旗をてんになひかし先陣後陣の列を糺し  
て先陣ははやかびらしや城までおしよせ後陣は  
流砂川のすへなる砂莫といふ所に叩てかね  
大鼓をならし鯨波をどつとあげたりしは  
身の毛もよだつばかりなり時にしつたは拾  
六才智仁勇の三徳自然と備り劍術飛行の  
名人殊更弓勢およぶかたなし百矢發て  
もやあたる  
百矢中五人張に十五束三つぶせ矢柄はおよそ  
箆竹のごとくなるに、大身鎚のごとくなる矢の「10ウ  
根をくつまきまで引返したる大のかぶら矢  
をつかひきりくと引しほりしはしねらつて  
切てはなせば此矢虚空にひびきてなり  
わたる事百千の雷、唯今爰に落かゝるか  
さしもの堤婆も矢風に霜て大地に  
ひれふすいわんやその外の雑兵どもなむや

桑原くんと臍をか、へてなきさけぶはきのどく  
 なりける戦ひなり斯て此矢の鳴動鎮り  
 しかば堤婆をはじめ人々ほつといきをつぎ」10の20オ  
 よふく心をとりになをして陣中を見てあれは  
 おそろしやな、鐵の盾の厚は尺にもこへたるを  
 七枚ならべてぐすと弱ぬきてうしろにあて  
 たるひゞら山といふ大山の中央をあなたへすつほり  
 いぬきし弓勢たとへんかたもあらばこそさてこそ  
 此矢のぬけし穴今の世に至りても確井峠  
 をとるる人心をつけて見給ふへし是が  
 よき證據なり打物とつてのはたらきは  
 かううがいきほひにもこへたり長郎がちぼう」10の20ウ  
 にもすぐれすじめといひ武勇とい、しからば此たび  
 の討手におゐてなにのふそくの候べしまづ  
 もつて貴殿には腹ばした、せたまふなよ  
 第一がふ文字大才文学なければ武もあるまし  
 そのゆへいかんとなれば不動といふ文字はうこかず  
 とはか、ざるや近く申さば文字に相違の  
 討手の望やはりそのま、爰にいられて  
 うこかずさらず此王城をまもり給ふべし

是が貴殿に相應といちばんにいれこまれて」21オ  
 不動はたちまち面色かわりむねんのほのを、後  
 光にもやしきばを嚙齒はならしたづさへ  
 持たるばくの繩をふたへにとつて腰に巻  
 ちから足をどうくどふみならすいきほいに臺座  
 岩も崩る、はかりの大音あげて申やういかに勢  
 至たしかにきけなんぞ釈迦の武功のみを  
 ほめて此大勢の其中にて我をは無筆よ  
 文盲よと恥辱をあたふる腹たちさよ、曩  
 謨三曼荼羅囉囉曰羅赦今こそ汝かいふ」21ウ  
 ごとく不動の文字是みよとてうこかずさらす  
 つ、たちあがりすでにかうよと見へにける法王此由  
 觀覽あつて善哉々かたぐし申所みな  
 もつて忠節のいたれる所なりたがひにい  
 こんあるまじとてじんくみめうの御声を  
 あげさせ制させ給へは双法鎮り本座に  
 こそは着にけり  
 釈尊へ三悪の討手仰付らる、事  
 斯て法王御前にくわんをんせいしの二ぼさつ」22オ  
 22ウ23オ挿絵

を初めとしておのゝれつをたゞし宝冠を

かたむけてこそ並居たり時に法王仰けるやうは

ぞんする子細の有によりまづ〳〵此度の討手

には釈尊たるへしそれ〳〵門出をいわゝんと

御事にて蓮の糸にで織たりし巾廣の

白綾に弥陀佛といふ文字をべつたりと

真筆を染させられ釈尊にこそは下され

ける誠まことに奇妙筆勢きせうしぜんにあらはれ

折ふし御手のふるへさせ給ふゆへ文字もふるふて」23ウ

見へけるはかの道風みちかぜがふるい筆もかくやとこそは

感じける時に法王あふせありけるは此筆

勢いきほのふるふ事は是ぞ筆法第一にして

剛敵退治ごうていぢ旗名号はたなごうのしるしなり 抑おさ震ふると

いふ文字は則すなはち地震ちしんのしんの字にして

易經えいきやうに日動而 健けん 剛中而應ごうちゆうにやう 大亨たいこう

以もつて正天せいてん之命のいのち也なりといへり又平沢先生は

乾兌離震巽坎艮坤此八ツの文字

をもつて五臟六符を見ぬくともいへり此中の「24オ

震の一字は文殊の預る所にして雷動の卦

といへり又方角ほうかくにとりては東ひがしとし万物ばんぶつ

不埒物語翻刻

是より生ずる五行にとりては木なり四季

に配当する時は春となる春は陽なり雷は

陽氣のさかんにして地中の陰雲をさそ

いのほせて水火相た、かふされはこそ雲中に

夥おびただしく敷声しこあつて象は見へされともそのひゞき

百里を震おどろかす是によつて震木雷動

とは申なり地震もまた〳〵此道理を以て」24ウ

地を震ふるとなり扱さ又弥陀佛三字は空假中

の三諦にして天人地の三才智仁勇の

三徳ともいへり抑佛の一字はイを弗と

書なり是は則すなはち欲界色界無色界の剛敵

たりといふとも容易拂ひのぞくの道理を

かたどるされは天台山におゐて妙楽大師の釈

文には三觀は阿弥陀の三字さとればすぐに

妙法華妙法蓮花の花をちらして花々敷

真先にたつるぞかし釈尊はや〳〵此箴を」25オ

なびかし百里を震おどろかし刀に血をぬらず

矢をあげずしていかなる剛敵なりともさつそく

にせめなびけんはあんのうちの事なるべしまた

此太刀と申事は往古東方の降三世と申ス」

鍛冶に申付百日の別行して四十八願力にて  
 加持し打たる本願力といふ四尺八寸ありけるに  
 大悲の弓に智恵の矢をとりそへてぞ下され  
 ける誠まことに奇代きたいのしだひなり釈尊をおし

いたゞき是見給へや諸ほさつたち初め笑ひし」25ウ

かたゞも是等程の御氣色はさぞうらやまし

かるらん弓箭のめんほくありかたし／＼たとへ

敵五道の冥官をもつて劔の山に楯籠とも我

また六通を現じて一戦にせめやぶりちんきん

をやすんじ奉らん今こそいさめ此駒よと

こんてい駒を引よせてゆらりと打乗給ひつ、

祇園精舎へかへられしはあつはれふしぎの大將

やと貴賤諸菩薩一同にほめぬものこそ

なかりけり扱それよりも不動は此たびの」26のオ

討手の願ひかなわずして打しほたれていたり

しが法王の御前に召れて仰わたされけるやうは

まづ／＼此たび不動には跡に残りて禁庭を

守護すべしとの勅定にて一振の利劔を

御てづから下されければ不動につこと打ゑみて有がたし

／＼誠まことに不思議の佛勅かなと三度頂戴仕くだんの利劔

をたづさへて昼夜是をはなたすして禁庭守

護とそ聞へける扱それよりも諸ほさつはうやまい

退出なされしは有かたかりける次第也 卷四終」26ウ

不埒物語卷之五

○祇園精舎の事

附り あらかん參會の事

はんどくが事

○釋尊三惡へ出陣の事

○三惡の都軍評義の事

○阿脩羅味方評義の事」中ノ一オ

(半丁空白) 中ノ一ウ

不埒物語卷之五

祇園精舎へ阿羅漢大衆參會の事

抑 釈尊のおはします祇園精舎と申すは西天竺

靈鷲山より辰巳にあつて方三万里の都

なり此地に宮殿樓客を構へ三重の樓門あり

五重の玉塔には多宝佛おはします其外久遠

の諸佛は瓔珞細軟の衣を脱鹿幣の衣

を着し慈悲万行の徳をあらはし四諦の

御法を説せ給ふ又丑寅にあつて高山有」2オ

鷲峯の双林山といへり山上に無熱池といふ

池有此山の中央に三重の鐘樓有此鐘は

往古釈尊法花經提婆品の御説法ありし時

不埒物語翻刻

八歳の龍女御説法を聴聞いたし此御経の功力

によつて下界のくるしみを離て南方無垢

世界に至る則此の法恩として龍宮界より

黄金を以て是を正真のむくに鑄たて、

釈尊へ獻するされはこそ山上の池に龍神

すんで常に此鐘を守護なせり扱また」2ウ

此かねをつく時は諸行無常是生滅法生滅

滅已寂滅為樂と響なり一たび此かねの

響を聞人煩惱の夢を覺す又鐘樓に

つゞきて一切經藏其外学寮数方の

軒をならべ阿羅漢大衆説法論義に丹

せいをぬきんじ日々夜々に法問の声に

心耳をすまず斯有がたき都なりしかるに

教主釈尊は西方より御帰城まし御前に

しやりほつ目蓮を召れ仰有けるは扱も此度」3オ

我三惡へ討手にむかふべきの仰をかうむる是に

よつてはやく大衆等を相集軍儀評定

いたさるべしとくくとの御捷なり目れん此出

うけたまはりかしこまつて候としゆるの堂番

はんどくをまねき寄て申されけるは此たび



諸国へへんさんに出られたる大衆其外あら

かんの面々までめさる、事のあるによりて

高樓に登てはやがねをつき五てんぢくへ

告しらすべしはやくと申されければはん」3ウ

とく此由承りとる物もとりあへすそうく御殿

をまかりたち鐘樓をさして立帰り早鐘の事

はたとわすれや、あつて又々御殿へまいり目連に

むかいて申スやう先程何事か仰られし事の

ありつるに承り候といそぎ帰り候道すからはたと

わすれて候ゆへ近比むつかしくおほしめさるべけれども

かさねては何事も御用の事御書付下さるべし

とそ申ける目連おかしく思ひながらいさい心得候とて

やがて筆をおつとりてたらじゆ葉に書付はんどくに」4オ

こそはわたされけり惣じて此はんどくといふ人は

釈尊の御弟子なれとも前世の戒行つたなき

ゆへにや小機下根にして我名をたにもしらすその

ほかの事は猶さらなれば我名を木札に書付て

常にくびにかけしなり此人死て後塚のうへに

ひとつの草生たり其かたちはじかみの葉に

似て初秋の比その根に花ありにほひかうはしく

あちはひ五味をかねたり此草の名を知る人なし

あるとき舍利弗是をとりて釈尊へ奉る教主是を」4ウ

御覽あつてぜんざいく此草ははんとくか塚より

生じたれはまさしく是はかれが精魂なるべし

かれは下根にして記憶なしすでに我名をしらす

札にしるしてくびにかけ常に我か名を荷なふたり

しからは此草の名は茗荷たるべし下根なるが

ゆへに花も下根にひらく俗此花をよんで茗荷の

子といふなるへし去によつて茗荷をくらへば

物わすれするなど、申事もはんどくが塚より

生じたるによりての事なるべしまたく瘡を煩」5オ

人おこりおちての、ちかならすめうがの子を喰す

るといふ事もふるい日をわする、といふ義理にや

あるらんみなく庸醫どものあやまりなるべし

とこそ御演説ましける斯てはんどくは

鐘樓に登くだんの札をよみながら扱は早鐘

をつけたの事かいなる事にや大衆たちを

御あつめなさる、といふ事はしらねとも鐘木の

綱にとりつきてゑいや声を出してつきければ

此かね五てんぢくへひきければ行脚に出られし」5ウ

大衆あらかん何事やらんと我もくとはせ集り  
祇園精舎の講堂の大床に社並居たり

時に釈尊出御あつて仰出されけるやうは此たび  
三悪へ討手の大将として發向いたすへきとの

仰をかうむるおのく宜敷軍儀いたさるべしとの  
御掟なり面々此よし承りかしくまつて候と扱それ

よりも大衆達大目健連、摩迦河旃延、阿泥  
駄劫資、橋梵、波提、各々評義まぢくなり

されどもいづれも智仁勇の三徳の佛法僧の「6才  
6ウ7才挿絵

三宝を合せて六明通の人々なればつまはじき  
せぬうちに先陣後陣のそなへまでことくく

相究まりすに羅睺羅太子先陣と聞へたり  
釋尊三悪へ出陣の事

已に評義相定り教主釈尊の御出陣今やくくと  
相待ける斯て其日に成りぬれば先陣羅睺羅

太子の御出立はだには蓮の糸にて五色に織たる  
御はた衣召れ圓頓の御腹巻妙法蓮花の甲

を召し威徳神通力といふ太刀を帯せ給ひこん」7ウ  
てい駒に金ふくりんの鞍をおきしやのくとねりを

相そへ目蓮舍利弗つばさの臣千式百五十の比丘  
を初めとして摩何波闍波提六千人そのほか

有学無学の大衆都合其勢六万九千九百  
余騎各々三衣法服を着し正法みけん

眞實の若君を大將軍として三途をさしてぞ  
押よせけり扱また兵糧の運送扶持方の下

行ならひに御馬の飼料にいたるまでしゆだつ  
長者に仰つけられければかしくまり候と大船」8才

千余艘はや先だつて葬隕川三途の大湊  
まで廻船する扱又釈尊の御出たちには應法

の妙服を召れうへには二十五帖の御けさに馬腦  
さんごのくわらをつけさせ四天に黄金の鈴を

ならし百万金色の蓮臺にあなうらを  
むすびやうらくけまんの御指物どうばん

ほうがいの御馬印十方衆生三字名号の  
御旗を真先にさしあげさせ八万四千の大衆

を二手にわけ扱又後陣は釈提桓因二万のけん」8ウ  
ぞく先陣後陣の軍法かたく兵士をだんくくに

くりいだしぎよりんくわくよくのそなへたゞしく  
先陣ははや三途のこなたに着しかども

後陣はいまだ祇園精舎にぢうまんして

おひた、し誠にてんかの耳目をおどろかす  
ばかりなり

三悪の都軍評義の事

それ天に口なしといへどもかならず人をもつて  
つぐる此事四方にかくれもなく三悪の都に」9オ  
傳へき、てうへをしたへとかへしけり炎魔此よし  
聞き召大きにおどろきそれはまことか偽りかと

あきればてたるばかりなりや、あつてくどき事社  
哀なりされとも後悔先にた、ず今更何程

くゆるとも是悲におよはぬしたひなり一方  
のかたきをもふせくへき兄弟のものともは  
中あしくそのうへ観目観鼻はおしこめ俱生  
臣はひつそくさせさて、いか成佛罰ぞや

誠に母の御いけん今ぞ身にしろるうやつらや」9ウ  
とやせんかくやとあきれがほ見るも中、き

のとくなり爰に炎王の御舎弟の泰山王は  
御中不和にてまし、けれとも此よしを  
つたへき、さすがにちなみのすてかたくとる物も  
とりあへずむまやに入つて見給へは折節鹿毛な

る馬のゆあらいしてありけるに鞍置ひまの

おしければとつて引よせはだせにひらりと  
打乗て一さんにとばせつ、炎王の御所にき

たり案内のいらばこそかしこに馬を乗捨て」10オ  
奥の一間にすつと通り大王の御前に畏る

時に大王泰山王を御覧じて御涙をはら、  
とながし玉ひさて、汝はよき所へ来るぞや

他人喰奇親は泣奇常々われらがあ  
しき事まつひらゆるし給はるべし此

たびの大難義たすけ玉へや泰山殿ひとへに  
たのむ、とて膝をなでたりさすつたりしり

もちついてぞよるこびけるや、あつて泰山王  
謹で大王にむかい申やう今更何程せんひを」10ウ

くゑさせ玉ふとも甲斐ござあるまじ此うへは  
唯々一刻もはやく阿脩羅へ御使札をつか

わされ御たのみあるならばよもやいなみは申さる  
まじとく、と有ければ大王此よし聞し召

あつはれ、よきしあんさすがにちなみほど  
あつて我にちからをそゆるぞやそれにつき

てもさしあたり書簡を早速した、めん人の

ひとりもあらは社兼々汝もしるごとく筆

たつしやなる俱生匠手まへの口からたのまれず」11オ

我は元来悪筆なりかれ是もつておやの

ばち母のいけんも聞いれず今更かゝるうき

めにあふ父大王の遊ばされし慎の一字の文字

母の詠歌の心こそ今ぞ思ひしられたり

さしもにたけき炎魔王皿のやうなるまなこ

より桃のやうなる御涙をほろり〜とお

とさるゝはさこそと思ひしられたり大王は

よふ〜心をとりなをしとかく此うへたれ

かれと申さずとも汝ちき〜是よりすぐに」11ウ

阿脩羅がかたへ罷こしよきにたのむ〜とて

手をあわせてぞのたまひけり御舎弟此由

聞き召さあらばそれがしまかりこしあ

しゆらをたのみ申べしもしもいなみ申なら

すくに迦樓羅か緊那羅王又は摩睺羅

迦王なりとも是悲〜味方にたのむべし

御心やすくおほしめせとかうげんはらつて

た、れしはあつはれたのもしくこそ聞へけれ

扱それよりも泰山王あしゆらがたへそ」12オ

12ウ13オ挿絵

いそがるゝほどなくあしゆらかやかたに着しかば

案内こふて内にいりあしゆらにたいめん

まし〜てみぎのしだひをかやう〜とく

わしくかたう申されければあしゆらいち〜

うけ玉り先もつて遠路と申し殊さら

世間物騒なる折から此所まで御来りん

数ならぬそれがしを烟王より御たのみ家のめん

ほく此うへやあらんさりながら兄弟のもの

どもをもまねきよせひとまつ評義仕りて」12ウ

うむのへんとう仕り候べしまつ〜しばらく

の内なりともそれにてゆるりと御やすみ

ひらにゆるりといひすて、おくをさして

そいりにける

あしゆら味方評儀の事

扱それよりもあしゆら王かるらまごらか

きんなら王其外郎等召あつめいかにかた〜

聞給へ此たび炎魔のふらち西方へ聞へ

釈尊討手の大將軍として三悪まぢかく」13の20オ

おしよせそうづ川原に陣小屋をかまへ

その勢幾百萬といふ事をしらず

是によつてゑんまくわきうにせまり舎弟の

泰山王といへるものをもつてわれにすくひ

の勢を乞此義いかゝあらんやおのゝいかにと申ける

時に家老をはじめ兄弟のめんゝいづれも

評義のまゆをひそむや、あつて家老の

跋婆多す、み出て申やう誠にもつて利の

当前去ながらすくひを出してまんゝいち」13の20ウ

敗軍などもいたしなば当家のめつぼうま

ねくに似たり又は勝利をゑ候ともゑんまの

武功にかぎるべし、なにさまよろしかる

ましと、みな一同に是を評すあしゆら、くわん

ゝと打うなづきもつともゝぐんぎ

一通の興義爰にありとて感心するさり

なから我所存もひととをり申しひらく

べし又此うへもやあらんか、きかまほし、

それ我ひと、せ佛法について帝釈と」21オ

いさ、か治定をあらそいし事有しからは

釈尊、ゑんまをほろぼしそれよりすくに、か

いぢんすべきにあらず、さつする所すぐに我館へ

とりかくべし元來佛力とい、殊さら

かちほこつたる大軍蜂のごとくにおこらば

此要害とてもあやうかるべししからば

此節炎魔に組するより外、愚意此

うへをしらずとこそは、のべられける兄弟の

人々を初めとしておのゝ至極と、うち」21ウ

うなづきさあらはゑんまへ此おもむきとくゝ

へんじいたさんとて泰山王にたいめん有り

扱々御待遠にこそありつらん去なから

一存の御返事も成りかたくしはらく延引

いたし候炎王より御たのみの段いさいこゝろへ

早速に士卒を相催し追掛打立申す

べし宜敷御披露下さるべしはやゝ

御帰宅候へと念比にこそ申けれ泰山此由

聞よりもあまりの事のうれしさに」22オ

海山かけて六万里をとぶがごとくにかへらる、斯

て阿脩羅は出陣とて馬物具もはれやかに

かるらさんならまごらとう其外優婆

塞、優婆夷まで都合その勢六万余鬼

くつばみをならしこくうをかけり中を

とび三悪さんあくさしてぞいそぎける利那せつなかあいだに  
あしゆら王三悪さんあくしやう城じやうに着つにけり炎王えんわう七悦しちえつの  
まゆをひらき山海さんかいの珍物ちんぶつにうどんそば  
きりとりそろへておもくもてなし給ひけり」22ウ  
しばらくあつて炎王えんわう申まをされけるやうは先まもつて  
此こたび御ごすくい下くださるゝだん殊更ことさらはるゝの海山うみやまを  
へだて、大軍だいくんを召めつれられ早速さつそくの御来駕ごらいが近比ちかひ  
もつてかたじけなしさだめて泰山たいさんが物がたり  
あらまし聞きしめさるらん扱々さて此こたび不慮ふりよ  
の大敵たいてきを引請進退身ひきうけしんたいにせまり候所ところに  
貴公きこうの御加勢ごかせいを得候えて我等われらは申まをに及およはず獄卒ごくそく  
どもに至いたるまでことごとく力ちからを得候段だんひとへに  
貴公きこうの御ごたすけと悦よろこいさみ給ひけり 卷の五終」23オ

不埒物語卷之六

○阿脩羅軍陣物語の事

○三悪合戦の事

附り 舍利弗目蓮働の事

○神通曾司討死の事

附り 劔の山大合戦の事

同卷之七目錄

○羅睺羅太子弓勢の事

附り 視目覲鼻さいこの事」1オ

○劔の山落城の事

炎魔降参の事

附り 能化地藏の事

三悪道安堵の事

六道の辻制札の事

西方より鏡をおくらせ給ふ事

附り 視目覲鼻の事」1ウ

不埒物語卷之六

阿脩羅軍儀物語の事

斯て大王は此たびあしゆらが大军を引卒して加勢に  
来うへは鬼に鉄棒心やすしさあらはあしゆらに酒

ひとつ我も一ばいのまんとてそれくどありければ  
時にあしゆら大王に打むかい扱此たびの軍儀士卒の  
手配いか御さだめ候ぞや承りたく候とあり  
ければ大王此よし聞し召されはにて候手前に軍  
学のもの言人もなく候ゆへいまだそのさたも」2オ  
いたし申さずいか、仕候てよろしかるべきや近  
比御苦勞ながら軍義一通りかたつて御き  
かせ下されかしとぞ申されけるしからはかたり  
申さんとてあしゆらは牀机引よせ腰打かけ  
ざいおつとつて申やうまづ惣勢都合十六万  
八千余鬼を三手にわけ観目覲鼻兩大  
将として六万余鬼を相そへ死出の山に登  
三途川を前にあて、川じりをさしふさぎ  
通路をとりきるべし扱それかきは劔の山を」2ウ  
うしろにあて前には葬隕の大川有つたへ  
うけたまわる当国にては軍役として常々  
女子に竹の根ほらせ御貯なさる、よし  
さぞ沢山にあるらん是くつきやうの事なり  
此竹を以て竹たばとなし葬隕の川尻  
より三途の川きしまですきまなくひ

しにゆわせ扱又劔の山の中央にやぐらを

あげさせ是よりつくわぬきずといふ大筒

をしかけおきて敵勢まぢかくおし寄来らは」3オ

長目半めのきらひなくこと／＼く打つふす

べき要害第一と此山をさだむべし

又大王には当城の御要害すいふんけんごに

御まもりあるべきなりその外兵糧の手

くばりこそかんじんにておはしまし候なり

たとへ積尊飛行のつばさあればとて何

ほどの事かあらんや積尊飛行せば我は

てつくわをふらしがんぜきをなげかけまん中

におつとりかこんで討取申さん事何より以て」3ウ

やすかるべし扱それよりもすぐに西方へ押

よせてんかのあんひをきわむべきなりとて

四方八めんに下知をなしけるありさまは

誠にゆゝしく見へにけり斯て時刻も

うつるへしはや／＼打たてものともと大

音あげてぞよばはりける八万余鬼を

三手にわけあか旗三なかれてんになびかし

つりがねの馬印を押たてさせつじ風の

不埒物語翻刻

おこりたるごとくにて劔の山に籠しは」4オ

あつはれ大将やと獄卒こそつてほめにけり

三悪の都合戦の事

干時炎王三年二月十五日積尊葬隕川原

に着岸まし／＼て濱の手に要害の城を

御普請あつて四百里四方に沢地を陣どり

三方に堀をほらせてそうづ川の水をせき

いれければしら波とう／＼としてあたかもこん

りんより涌出るがごとし壑間そとはを以て

三悪のみちをかこみ柵を三重につけて」4ウ

馬ふせぎの十手を高くつかせ陣小屋の軒を

ならべ垂木／＼にわうごんの風鈴を釣して

士卒のねぶりをさます又夜討の用心き

びしくけんごにまもり夜に入ぬれば鉦太鼓笙

婿粟の調をそろへ怨をたゞし相廻り

つまり／＼に篝火おひた、しくたきたて

その火さながら天のこがすがことしあくれば

辰の上刻より羅睺羅太子は六万余騎を前

後にたて、三字名号の御はたをおしたて」5オ

先陣ははや三途の川をおしわたらんとて

五七



五百の大衆あらかんを初めとして我もくくと  
衣ころもの裾すそを高く引あげぬいやくくとす、み  
ける敵陣てきぢんよりも観目くわめ観鼻くわな両大将りやうだいしやうこの

よしを見るよりもあれわたすなものともよ  
あますなもらすな討うとれとて魔まおつとりて  
下知げじをなせば承り候とて雑兵ざつひやうあまたやり

ぶすまをつくつておいかへさんおしわたらんと

おめきさげんて戦たたかふありさま大海だいかいうしほも」5ウ

わきかへり血ちは涿鹿たくろくの川となつて紅派かうは盾たてを

流ながし白刃はくじん骨ほねをくだき爰こゝをさいごと戦たたかひ

けり双方ふかた義ぎをおもんじ死しをかるく決断けつだん

勝負しやうふまぢくなり目蓮もくれん舍利しやり弗はつ此こゝ有

さまを見るよりも衣ころもをぬぎすて大手こゝろを

ひろげて飛行ひやうぎやうのはたらき物ものによくく

たとふればむかし娑婆しや世界せかいにおゐて治承じせう

の夏なつの比宮軍ひみやぐんのありし時宇治川うぢがはの合戦がっせんに

筒井ついでいの浄明じやうめい一來法師いちらいほふしふたりの坊主ぼうずの」6オ

6ウ7オ挿絵

かるわざも中々ちやうぢやう是こゝにはおよぶまじ敵てきみかたの  
ねふりをこそはさましけりむらがるものおは

とつて引よせぬちくびつ、ぬき人つおてむ  
かふてきをばわりたてくさながら手肩ておし猪いのの  
あれたるがごとくにて八方はつぱうに切ちらせばあ

たりに近く敵てきもなししはしの内うちにくつきやうの  
首くび百八ひやくはち討うとりじゆすつなぎといふ物ものにたんぐくに  
つなぎ給たまひてしはしはいきをそつかれる期かた

命まことを的まとにかけていそかわしきその中なかにも折を」11ウ

ふし三途さんずの川原がはらにあざみといへる草花くさなの盛さかり

なるもなかはは手肩ておしのあけにそみて皆みなくれ

なるに見へけるをしばらく詠よめ給たまふ所に、なに

もの、しわざにやありけんひとものあざみの

くきにたんざくをつけてあり目蓮もくれんあやしく

おほし召よとりあげ見みれは○百八ひやくはちのなみだやか、る

鬼おにあざみ扱つかは傳つたへ聞きし此この比ころ三さん悪あくに時行ときぎやう

發句はつぐとやらなるべしさてくやさしき事

かなまことに鬼おにの目めになみだとはかやうの事をや」12オ

いふなるべしとてしばしはかんじ給たまひけり

さてそれよりもくだんの首くびあまたの大衆たいしゆ鬼おに

ましりにかけ念仏ねんぶつのゑいや声こゑせめ念仏ねんぶつにて

引張ひっぱ合あたがひに首くびをあらそいけるさてこそ

まつせにいたるまでしゆず玉のその数を百八とは  
申なりせめ念佛と申事も此時よりこそ  
はしまるなり

神通曹司討死の事

されとも敵もさすがなればあら手をいれ」12ウ  
かへ石火矢鉄炮すきまもなくうちたて矢  
たばをたとうでた、かひければさしものもく  
れんしやりほつも大軍にうちたてられ  
みの毛のごとくに矢を肩てたちの刃も  
さ、らのことくになりけり味方にも手  
のものども八十三騎枕をそろへて討死を  
こそしたりけり今は目蓮ふかいりしては  
あしかりなんとてむらかる敵をおつはらい  
本陣さしてたちかへり太子の御旗元を見て」13オ  
あれはばつくんうすくぞ見へにける敵せい  
此よし見るよりも達兵きうにもみ  
たてさしはさんで討とれとてゑいや声を  
出し鯨波をつくりおめき叫喚きつて  
かゝるいよくあやうく見へにけりかゝりける  
ところにしゆだつがちやくし神通曹司は

不埒物語翻刻

すこしへだて、戦ひしが此よしを見るより  
もさあらは太子の御旗本へ御かせい申さん  
とて死をせんとうにまもるも此時なりとて」13ウ  
手ぜい引ぐしたすけ来りくもでかくなわ十  
もんじこくうむりやうにきつてまわりかぐ  
はながはたもとへかけいりてついに討死をぞ  
したりけり生年つもつて十八才五てん  
ぢくにかくれもなき美男にてはしのく玉の  
きさきさへ恋わび給ふ程のきりやうなれば  
その外の文玉つさかづもかぎりもな  
かりけり殊さら文武二道はいふにおよ  
ばず色もなさけもふかくしてむくわん」14オ  
のたゆふあつもりくすの木まさつらと申とも  
是にはいかてまさるべし日比心ばへもたかかり  
しがはたして忠死をとげたりとて  
雑兵獄卒おしなへてよろいの袖をぞ  
しほりけり

阿難迦葉神通が行衛尋る事

斯てその日のた、かひもたつの上刻より  
酉の下刻にいたるまでいきをもつかずた、

かひしかば相引にこそはひいたりけりすでに」14ウ  
その日も暮ければたかひの陣やに、篝火をたきて

用心きひしく見へにけり羅睺羅太子の御本陣

阿難迦葉は言葉をそろへて申すやう君の

御はたもとばつくんうすく相見へこん日の

御た、かひすでにあやうく相見へ候所に

神通曹司か横矢に躬くずしその身

も鼻鼻かはた本へかけいり敵とくんで

ついに討死をつかまつり候是によつて

敵ぜいも次行になつて双方相引に」15オ

引しりぞきさてこそ君の御そなへもつ、が

なくわたらせたまひ候誠に義をおもんじ

忠死をつかまつたる若もの通次信にも

おとるましき神通曹司かなと鬼をもあざ

むくあなんかせう衣のそでをぞしほらる、

さてそれよりもふたりのそんじやは御本陣を

たちいで、曹司がゆくへたづねんとて沢地に

くたりて三途の川ばたこ、やかしこと

たつぬれとも鬼の死がいの山をつみ」15ウ

かさねくらすはくらし道見へずせんかたも

なくふたりのそんじや今は本陣にかへらんと

せし所に四手の山のいたゞきより月ほの

ほのと見へければうれしや是をちから

として神通曹司はおはせぬかぞうしは是

ではなきかやとあなたこなたと見し所に

敵方の獄卒三人たちいで、あなんにむかい

申やう御たつねなざる、は若衆様の御事

かやもしもその御かたさまの事にましまさば」16オ

16ウ17オ挿絵

御おしへ申べしいまだいきもかよはせ候なり我々

どもあしゆらがたのものにて候へどもあまりの

事のおいとしさに此川はたよりあれなる

大木のもとへ戸板にのせまいせ唯今送り

まいらせ候なり御道しるべいたし申さんいざ、せ給へ

とて三鬼はそんじやの先にたちてぞとも

ないけるかしこになればふたりのそんじやさては

是こそぞうしなり、あまりの事のうれし

さになくより外の事そなし斯て二人の」17ウ

そんじやたちはあとやまくらにたちよりにてさま

ざまいたわりたまひつ、いかにぞうし心は

なにとさふらふとたづね給へはいたわしややうくと  
まくらをあげさもくるしげなるいきのした

よりも太子様には御つ、がなくわたらせ

給ふか御きけんのほどいぶかしさよきかま

ほしきにいま、でいきもかよふなりといふ

声もたへくなりひやうぞう兩僧此よし聞きよりも

あつはれさすかにぞうしかな太子様につ、がも」18オ

なし外にい、おく事あらはいのちのうち

なになりともわれくどもにかたり給ふべしと

なみたながらにとひければ有がたしく

なにのねがひもさふらはす去さりながらなきからを

けふりとなして下さるべし是のみたのみ

たてまつるといふ声こゑの下よりも早はやたへ

だへにぞなりにけりなみだなみだをながし

給へは獄卒ごくそつ三人もろともに声こゑをはかりに

なきにけりやうくなみだなみだをおさへつ、はや」18ウ

しの、めもちかかふるべしとくくけふりと

なさんとて篝かざりのたきさしとりあつめ一へん

の煙けむりりとなし骨こつをうつわにひろいつ、

西天竺ぢくへぞおくらる、あわれといふもあまり

### 不埒物語翻刻

ありほどなくしの、め明わたり敗軍はいくんの

若ものども五騎三騎つ、太子の御はた本へ

はせあつまるもの、やうくと千騎にはたら

さりしに舍利しやり弗目蓮はつめぐんざい魔おつとり大音だいきん

あげて申やういかにめんく今日けふの合戦かつせんに」19オ

歩行武者からむたいきゅうち一騎討とめたるものには御ほうび

として三十さんじゅう依い人にん扶持ふち騎馬きば武者むしゃ一騎いつきうち

落おちしたるにおゐては百石ひゃくの褒美ほうびたる

べしとふれければ若者わかしよどもはいさみを

なししからは此うへ手がらしだいすいふんはた

らき申さんとしてしづまりかへつてひかへしは

たのもしくこそは見へにけり

### 劍の山合戦の事

斯かて太子たしはきのふの御た、かひあやうく見へ」19ウ

させ給ふ所に神通じんつう曹司そうし横矢よこやに躬崩いこうし

つきくづし相た、かつて討死うちじをとげたりし

ゆへにより御つ、がなく御本陣ほんじんへいらせ給ふぞ

目出たけれ扱さそれよりも御手ごてぜいにたんぐくに

相くわ、り三千余騎さんぜんよきとぞ聞へけるあしゆらが

出張てはりの劍つぎの山におしよせ鯨波くじなみの声をぞあげ

にけり数万のかたき此よしを見るよりも太子  
の勢はわつかにして三千騎にはよもすぎじ  
先陣後陣ひとつになつて中にとりこめ」20オ  
討とれとて十万余鬼が一手になつておそひ  
きたる所に太子のそなへの堅固なるを  
見ておいとゞまりてぞひかへけるかゝりける所に  
あなんのふせ勢式千余騎一どにとつとあらはれ  
出狸々緋のてつほう五百挺ひぎたいにてうた  
せければあだはひとつもなかりけり白しないの  
弓五百張爰をせんどゝ躬けるまゝ盾竹  
たばもたまらばこそ死人の山をそつきに  
ける

不埒物語卷之七

羅睺羅太子弓勢の事

されども敵勢数万鬼の事なれば死人のうへを乗越

あら手をかへて戦へばひるむけしきは見へざりける

かゝりける所にめての山脇より十方衆生の御旗

日月のごとくおしあげければさては此旗はまさしく

釈尊の御馬を出されけるはとかたき勢は

見るよりもおそれおのゝき雑兵獄卒たまり

かね風に木の葉のちるごとくむらくはつとぞ」一オ

落うせける見るめかくはな両大將士卒を

はげましせいすれどもおくびやう風にさそはれて

崩れたつたる雑兵獄卒何かわもつととまる

べし一鬼も残らず逃うせたりされどもその

中にも義をおもんじたる手のものどもやうくと

百鬼にはたらざりける太子此よし御覽じて

ぜつたいぜつめい爰なりとてやぐらにひらりと

あかり給ひ大悲の弓に智恵の矢をはげきり

きりと引しほりしばしためらいゑいやつと」一ウ

きつてはなせばむさんやなかぐはながむないた

をくすと躬とをし後にひかへし見るめの大臣

かぶとのみけんにはつしとたち血しほになりて

矢じり四五寸しころがねのところを射いだし

給へは何かわもつてたまるへき馬より下にどうど

落る目蓮すかさずつとより観目嶮鼻

ふたりの首水もたまらず打おとしあしゆらが

陣にぞおくられけり扱又太子の弓勢は百合若

大臣八郎為朝と申とも是にはいかでかまさ」二オ

2ウ3オ挿絵

るべしとて残りしやつはらおそれをなし

劔の山へぞ逃かへるあしゆら大きに肝をつぶし

さては釈尊此所までよせきたる事程も

あるましおのく用意いたされよとかるら

まごらかきんなら王あわてふためきうへをし

たへとかへしけり

劔の山落城の事

斯て釈尊は三途川原の合戦に勝利を得た

まみ見るめかくはな両大將を討取それよりも」3ウ

だんくにせめいり給ひ劔の山をとをまきにし

て御覽あるに四方谷ふかふして岩そひへ

がんにんにほねをうづみばんこもくせん

けうかいけんかべうくとして岩ほが、たり  
前には血の池の浪とうくとしてなまぐさき  
事鼻をおほふ峯にはれいせうぎ、として  
死かばねをさらし萬木黒雲をつらぬき

日月のひかり目に見ゆる事さらになし

又南にあたつてその高さ数千丈もあなた」4才

より霞に落る瀧のありみな紅井の血しほ

なり山の中央に三重のやくらあり是こそ

あしゆらか本陣なるべし誠にく鬼すむ山

とておそろしき身の毛もよたつばかりなり

ふもとに陣小屋軒をならべ石垣高塀ことく

しくあるいは石火矢ほうろく火矢そのほか

てつ火ぬぎずまで矢さまくにしかけおきて

すわともいはうちくづさんずるけしきなり

しやくそん此よし御らんじて味方の軍勢に」4ウ

仰ありけるはたとへかたき幾百万鬼あると

ても味方の軍兵一手になつて四方八めん

たゞ一さんに惣せめにいたさるへしとの御下知

なり大衆軍兵此よしを承りもつともさ

やうしかるべしとてそれよりもおのくは

せめいるへき刻限をいまやくと相まちけりか  
くてあしゆらはくんだりよをめぐらしかるらにむ  
かいて申やういかにかるら聞給へ大軍にむかつて  
勝利をえん事は夜討にししくはなし此義」5才

いかゞあらんやと申ければかるらを初めきんなら

まごらにいたるまでもつともくしかるへしさ

あらは用意仕れと小姓馬廻りにいたるまで

そのきりやうをえらみてすぐやかなるものども

ばかり八千余鬼をすぐりたて釈尊のおはし

ます御出張のとをまきまでその夜のうし

みつ比一方よりせめいり三方より五どうの

めうくわんをもつて陣小屋に火をかけさせ

ければ折ふしびらん風といふ風たゞ一通に」5ウ

はげしく吹て人馬の肉を吹きる事あた

かもまぐるのたちうりのごとくにして

いさこをまくりあげてふきたてくするほ

どになにかわもつてたまべき陣小屋た

かへい柵もがり葶壳をたくにさも

似たりその火てんにほどはしりてひさう

ひゞそうてんをこがす地は又こんりんなら

くのもそまでやけぬけしはおそろしなんど、  
いわんにもけふりにむせびて声もいはず」6オ  
大地にひれふすばかりなりされとも釈尊の  
御はた本には十六羅漢の初めとして五百の  
大衆大あらかん六明通の人々なればかねて  
かくごの御事ゆへすこしもおとろき給はず  
して白しないの弓五百張てつほう千挺  
くつきやうの躬手打手をそろへ先手を張  
こまのかしらをかんとうにたてて鎧ぶすまを  
つくりて御本陣を十重廿重にかためて  
相さ、ゆしやくそんなもとよりふてき第一の」6ウ  
御大将にてましますばすこしもさわぎ給はず  
もくれんはなきかあれ消との御下知なり  
目蓮此よし承りかしこまつて候とたちまち  
しゆみせんへとひのぼりそうめい海の潮を  
けしの壳にて汲かけくしたまへはほの  
をさかんにもへあがりし火はことくくきへ  
けれともぢやう夜のやみの黒けふりに  
こんざつしていづれか敵いづれを味方といふ  
わかちもなくおめきさけぶその声は山も」7オ

不埒物語翻刻

くづる、ばかりなり時に釈尊此ありさまを  
御覽じて八万四千の大光明をはなし  
給へはふしきやな大千世界の草も木も  
みな金色の浄土となる敵勢猶もひる  
まずして矢さきをそろへてさしつめ引つめ  
躬かけ奉る矢さきは則ごとくく八ようの  
れんげとなる打かくるてつほうはかへつて  
身にあたるさしもにはやりしあしゆらが  
大軍此いきほひにおそれをなし打ものを」7ウ  
すてかぶとをぬぎてかうさんし佛の弟子と  
なるもありあしゆら此よし見るよりも大き  
にいかつてそばにありける八尺あまりの火石  
をかるく引さげ目より高くさしあげ  
釈尊をめぐけつ、みちんになさんとくたん  
の火石ゑいやうとなげつけ、れはそのいし  
佛のひたりの御あしへあたりて小ゆび先より  
血をすこしいたしけりさてこそぶつばち  
たち所にあたつてたちまち大地さけて」8オ  
いきながらないりのそこにしづみけりしやくそん  
是を御覽じて扱もふびんの事かなもつとも



おのがつくれる罪とはい、ながらせては  
雑兵の手になりともわたりあい運のてんに

まかせ討死をいたすとも又はしやうがい致とも是  
こそ大将たるもの、ならないなるになんぞやさには

あらずしてあぢな穴へ落るる事のふびん

さよ我はまつたく罰あたれとおもはぬぞや

帝釈天のゆるさぬぞやせめて此節さい」8ウ

ほうのくわんせをんをたのみなばよもやあなへは  
はいるましくわんをんのせいぐわんには我をねんする

ともからはたとへ大きな火のあなへおし落されて

はいるともたちまちに火坑變成池 とのち

かひぞかしさりながら是もまた水心をしら

ざれはその池水におほれつ、ついには死ぬで

あらふぞや扱もふびんのあしゆらやともつたい

なくも御涙をなかせ給ふぞありかたき誠に

提婆が悪もくわんをんの慈悲とてあしゆらは」9オ

あちな穴へおちけるなりされはこそ此あな

今に三途にあるとなり誠にくおそる

べきは色欲酒の三つにありかるがゆへに

其本亂而未治者否矣といへりひとつは

衆歛の臣おほくして上を掠善を非と  
なし悪を是としての疾なり唯故人の  
おしゆる所ならくのみ今社おもひしら  
れたり

炎魔降参の事」9ウ

三悪の都には前後のた、かひに勝利をうしない

大王をはじめ兄弟の人々げつけいうんかく

あんにそういしつえはしらともおもひし

阿脩羅は穴へ深入してかへる事やら

かへらぬやらもはやたのみにならぬぞや

観目鯨鼻二人のものは討死しとかく

何とぞわぼくをこひ命ばかりもたすかりて

当家そうぞくいたす事はそかんじんか

なめなり命あつての物たねなりかたく」10オ

いかにと申さる、おのく此義もつもとしかるべし

さいわひ此比俱生臣は佛法を聞信して

みろくといふ古主のよしみをもつて羅睺羅

太子の御前にいたりて再三なげきしかば

羅ごらいちくしだひを聞き召御なつとくの

うへそのこうをたて、御しやめんあつて此ころ

積尊しやくそんのはつかにくだりまかりあるかれをもつて

御みなげきあるならば慈悲じひた第一だいいちの大将だいしやうなれば

かならず御みゆうめんあるへきなりとくく」と10ウ

す、むれは大王おうち打うちうなづきもつとも道理だうり

しごくせり去さながら我等われらがふかく不ふ

埒らちゆへ官録くわんろくともにとけあげしふそく

恨うらみのあるゆへにはや先またつて降くだしぞや

是も手前てまへのあしきゆへ人を恨うらとおもふ

ましされはこそ古哥ふるうたにも我われかよきに

人のあしきのあらはこそ人のあしきは

我われかあしきなり人をたのむにおよぶまし

そこがさすがにおとこなりまづくあかぬ」11オ

中ななれども十郎じゅうら姫ひめにも三さんくんだり半はんのおき

みやげ是こゝよりすぐに積尊しやくそんの御前みまへへまいり

申まをべしはやく用意ようい有あへしとて日比相ひひさ伴ばん

臣下しんか五人ごにんはたちばかりの小姓こせう老人らうじん召まつれて

積尊しやくそんのおはします御本陣みほんぢんへぞいそがる、

御本陣みほんぢんにもなりしかば御みしらすに平へい

伏かし御みとりつぎをもつていちくしだひを

言上ごんじやうなすとまる所ところは何なにとそひとへに御み

不埒物語翻刻

慈悲じひをもつて此こゝたびのふ埒御らちゆうめんを」11ウ

かうむり命いのちはかりも御みたすけ下くだされ候こうやうに

よろしく御みとりなしをねがひたてまつると

なみだをながし申まをけるはよその見るめも

あはれなり時に天眼てんげん第一だいいちの阿那律あなりつそじや尊者そんじや

此こゝよしをうけたまはり今いまぞまことに本心ほんしんに

たちもどり申まをさる、だんいさいこ、ろへ申まをなり

心こゝろやすくおもはるべしはらくそれに

御みひかへとい、すて、すぐに御前みまへへまかり出い

炎魔えんまのねかひかやうくと奏そうしければ」12オ

12ウ13オ挿絵

積尊しやくそんよしを聞き召まれもつともさこそ

ありたけれと早速さつそくに御みたいめんましくく

誠まことに汝なんじ自国じこくにあつて自由じゆゆの至いたりその

罪つみはなはだかるからず此こゝ次ついで而でをもつて根ね

葉はをもたつへきの所ところなれともけうくわん

王おうより年久としひさしき三惡さんあくの惣追罰そうついまちの大王だいおうち

なればまづく此こゝたひのふらち赦免しやくめんいたす

べし此こゝうへすいぶん善心ぜんしんに立たもととりて色欲いろよく

酒さけのみつをつ、しみ兄弟きやうだいの中なかむつましく」12ウ

六七

国民のせいいたうによこしまなく又はひいきま  
 なひのさたなきやうに相まもるべしとて

唯いつたんの御しかりにてぞんじよらざる

御こんせつなる御ことばに炎魔をはしめ

兄弟の九王家臣の面々にいたるまで

おのゝかうべを地につけ誠にもつて

有がたき佛勅かなとくわんきのなみだに

いづれもたもとをしほりける其時釈尊仰

有ける汝が家臣忠信第一の俱生の両臣」14才

汝が不埒にまかせて官録を召はなすといへ

どもかれは汝を恨ずして己を恨はやさき

だつて羅睺羅が手に候ぞや此うへは俱生

両臣のもの官録を相まし召つかふべしとの

仰なり炎魔佛勅を承り誠に以てあり

かたき御事かなたゞいま、ては色欲酒にふけり

俱生臣の官録をもとりあげ国家の政道を

とりうしない候段ひとへに天道へたいし又は

父母へ不忠不孝その罪のがる、事をしらす」14ウ

たちまちに御罰とかうむり此身のほろぶべき

所に釈尊の御慈悲くわんじんたいにして

御ゆうめんのだん五臟六府にしみくどあり

がたき事言説のおよぶ所にあらず俱生臣

にも官録をまし召仕申候べしそのうへさい

の川原の地蔵と諸とも我も則能化地蔵と

あらわれ六道の辻に立てまよひの衆生を

みちびき善所にいたらしめ申べし御經文

の心のごとく不借身命をなげうち忠節を」15才

ぬきんじ申へしとそ奏しけるしやくそん

いちく聞し召善哉く汝しらずや

九遠實成より汝は地蔵の化現なるぞや

今又能化の二字は汝か發明末法相應

当世の梵夫下根下性にして其智うすく

末法にいたりてはさらなり我れ滅しての後釈

門たるもの、口より出る所の十念名号といふ

事いづれかへだてあらんや唯々末法の凡夫

色衣絹衣をたつとんで木布黒衣を嫌事」15ウ

のあるなるべし是を則まよひのほんぶとは申なり

しからは汝末法末世にいたるまで老若なんによ

童男童女のこゝろくにしたかつて能化

その氣に應しまよひのともからをよく

みちびき申さるべしとのたまひそのま、御座をた、せ給ひて寶塔の中にいらせ給へは  
焔魔えんまをはしめ人々ひとびとは有かたしと三度さんど  
拜はいしたまひけり扱さこそ炎魔えんまは地藏の

化身けんげんとは申なりまよへはゑんまさとれば地藏じざい」16才

いつれか兩説りやうせつ何うたがふにたらず扱さそれより  
も炎魔王えんまおう本領をあんとしておのく枕まくら

を大山のやすきにおかんとよるこひのまゆ

をひらきしやくそののいらせ給ふ宝塔ほうとうの

御かたをふしおがみく三悪さんあくさして帰らる、

誠に日出たきしたひなり

#### 釈尊しやくそん三悪さんあくへ制札せいさつ之事

釈尊しやくそんの御前ごぜんへ舍利弗せりふ目蓮もくれん兩僧りやうそうを召れ

いかにかた／＼此たび炎魔えんまが降參かうさん九王くわうの」16ウ

面々めんめん俱生くせい臣しんにいたるまで三悪さんあくの政道せいだう御おき

てのとをり急度きゅうど相守あいまもりそのうへゑんまは

分身ぶんしんの能化のうけ地藏じざいと現しさいのかわらの

地藏じざいと申合せて六道りくどうの辻にたちまよひ

の凡夫ぼんぷをみちびき申べきのよしこれに

よつて本領ほんりやうをあんといたさせ候よし西方へ

そうもんせんとかく用意有へし

との御てうなり時に羅睺羅太子らごら此由を

聞し召しからばそれがし是よりすくに西方へ」17才

まいらんとてこんでい駒こまに打のらせ西方せいほうさしてそ

いそがる、しやくそも西天竺さいてんぢくへかへらせ給ふそゆ、

しけれ祇園精舎ぎえんしやうじやにいらせ給ひ目蓮もくれんを召れ

仰わたされけるやうはぞんずるしさいのあるに

より制札せいさつを相した、めけるはやく三悪さんあくへおくる

べしとの御掟ごていなり目蓮もくれんよしをうけ玉り

畏かしこまつて候と制札せいさつをこそした、めけるその

文ぶんに曰いわく

#### 制札せいさつ之事」17ウ

一忠孝ちゆうこうを上げまし夫かうふ兄弟あやうたいしよん諸親類しよじんるいにむつ

ましく召仕めしつかいの獄卒ごくそつに至まで憐あはれみをくはふべき事

一萬事ばんじおごりをいたすべからす衣類いるい食事に至迄いたるまで

けんやく第一だいいちにいたし虎この革かわの禪ぜんは目見めみ以上の

獄卒ごくそつたるへし其以下そのひかは虎斑こへんのみ紙かみを用もちべき事

一盜賊たうさく並な惡堂あくどうゆすりのやから有これある之におゐては

早速さつそつ訴出そつだへしご褒美ほうびとして虎革こかわ三枚さんまい下さるべき事

一輩たうじ「三途さんずに」建立けんりついたし候遊女ゆうぢよ町の外ほかに抱遊かひゆう女ぢよいたしおき

或は呼出し、繻摘山猪のたぐひし外より「外より」慶大本抹消」

18才

相しれ候は、いち／＼召捕へ弓削道鏡か手に

かけさせさいなますへき事

一鬼の賣買かたく令停止之並年季に

召抱候小鬼女鬼たりとも十年に限るべき事

一俗家におゐて宗論かたく令停止十宗八宗に

わかつといへとも方便といふ事をしらずおのれが

家職をわすれて宗論をいたし又は菩提所を

捨置他へ無益の建立を企申敷事

一阿脩羅がごとき魔法あほうをつくすもの」18ウ

これあるにおいては早速訴出べし御ほうびと

して無疵の豹の革拾枚下さるべき事

右之條々急度可相守之相そむく獄卒

これあるにおゐていち／＼角をもぎとり

鬼術をぬき新發知入道いたさすへき者也

仍 如件

閻王三年月日 目蓮判

となされつ、三悪へおくられる扱こそ末世に

いたりても六道の辻に此制札のあると也

19ウ20才挿絵

西方より三悪へ鏡をおくらせ給ふ事

其後西方十萬億土国よりも大勢至をもつて

一面の鏡をおくらせ給ひけり炎王是をおし

いた、さか、みにむかつて見てあれはふしぎや

観目鯨鼻二人の首くだんの鏡にあらはれ

両眼を見ひらき大王にむかつて申やうあり

がたし／＼からだは戦場の土となりても魂は

首にとゞまりみろくの出世のあかつきまで永

衆生の善悪を見と、け理非明白に告しらせ」20ウ

申べしかならずうたがひたまふなとありしに

かはらぬ声音にて高らかにこそ申けれ

炎王大きによるこび給ひ二人の首を連

墓へ乗置昼夜に側をはなさずして

理非善悪をきかけける是忠臣の随一なり

さればこそ末世の今にいたるまで見るめ

かく鼻ひたつの首浄婆利の鏡とて是ぞ

三悪第一のたからとこそは聞へけれ

不埒物語第七

大尾」21才

寶曆五乙亥正月吉日

日本橋通三町目

吉文字屋治郎兵衛

東都書林

浅草御藏前

横田屋半治郎

神田八軒町

細工

小嶋茂八